

インダス・プロジェクトによる インダス遺跡の発掘調査

上杉 彰紀
総合地球環境学研究所

1 はじめに

インダス・プロジェクト物質文化研究グループではインドおよびパキスタンの研究者と共同で発掘調査を計画している。すでにインドではグジャラート州カッチ地方に所在するカーンメール (Kanmer) 遺跡 (Kharakwal 2007, 2008)、ハリヤーナー州に所在するファルマーナー遺跡 (Farmana)、ギラーワル (Girawad) 遺跡、ミタータル (Mitathal) 遺跡で発掘調査を行っている (Shinde 2008a, b)。加えて、パキスタン・パンジャブ州に所在するガンウェリワラー (Ganweriwala) 遺跡でも発掘調査を予定している (図 1)。

小稿では、2007 年度までの発掘調査成果について紹介するとともに、今後の調査・研究課題を提示する目的で、インダス考古学研究における調査成果の位置づけを模索することを試みる。

2 カーンメール遺跡の発掘調査

まず、グジャラート州カッチ地方に所在するカーンメール遺跡の調査成果について概観する。カーンメール遺跡はグジャラート州の西半部を占めるカッチ地方に位置し (23°25'04"N, 70°51'49"E)、同地方を特徴づけるカッチ湿原東半部のリトル・ラン (Little Rann) に面している。遺跡は 1985 年度のシーズンに発見されていたが (IAR 1985-86: 15-19)、発掘調査が実施されるのは本プロジェクトがはじめてである。発掘調査は 2005 年度に開始し、すでに 3 ヶ年にわたる発掘調査が行われている。発掘調査を担当するのは、ラージャスターン・ヴィディヤピート大学 (JRN Rajasthan Vidyapeeth) の准教授 J.S. カラクワール (Kharakwal) で、日本隊は遺跡の空間情報の記録 (詳細については本書掲載の寺村裕史ほかによる報告を参照されたい) および出土遺物の整理を担当している。

カッチ地方のインダス遺跡

グジャラート地方はアラビア海に面する地域で、その中央部にはカッチ湿原 (Rann of Kachchh) が広がっている。海水面の変動によりカッチ湿原とアラビア海は容易に接続する状況にあり、インダス文明当時の前 3 千年紀後半には海洋交易の拠点となっていた可能性も考えられるところである。

このカッチ地方ではこれまで 60 ヶ所程度のインダス文明関連遺跡が確認されている (図 2)

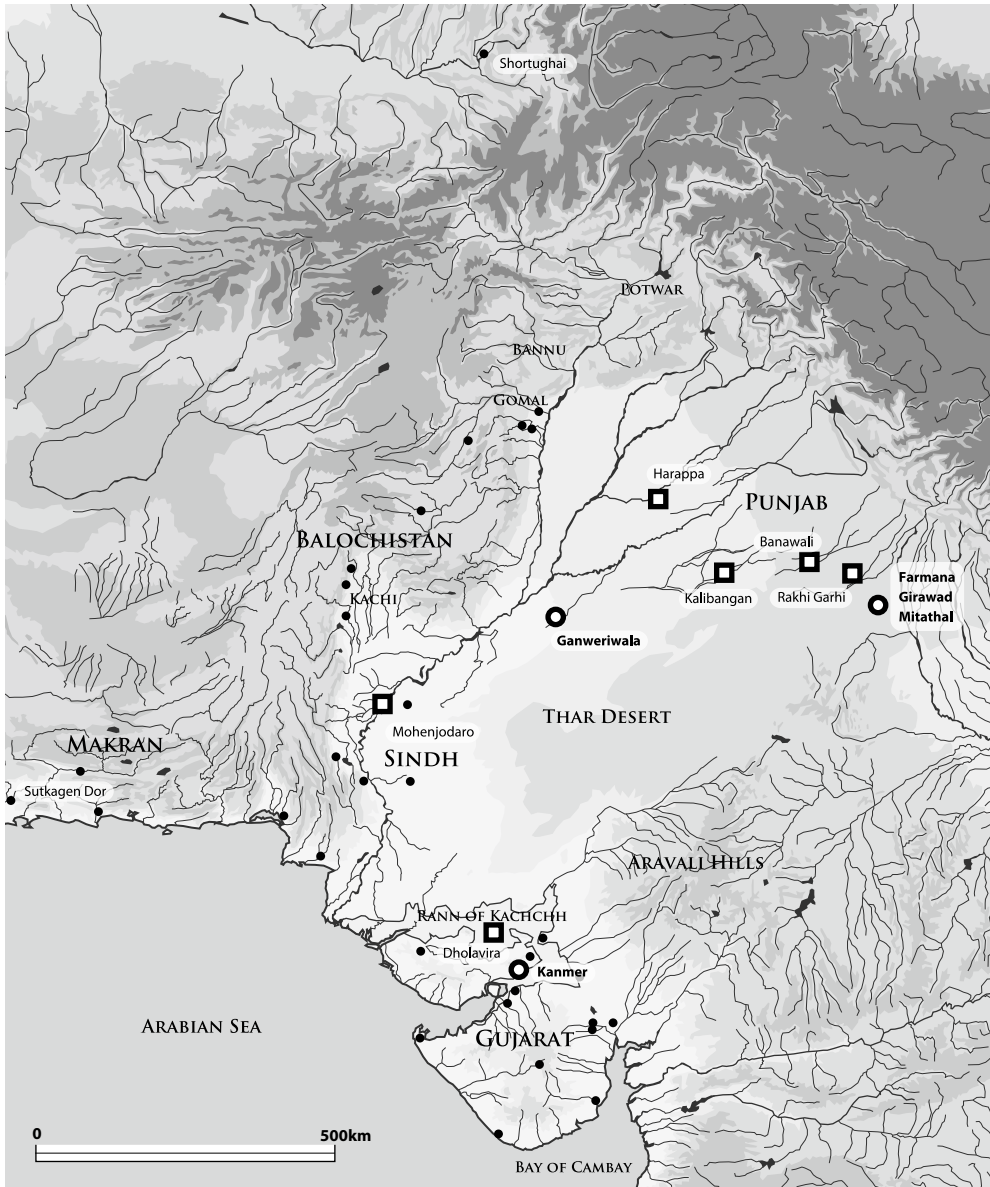


図1 代表的なインダス文明遺跡と調査遺跡の分布

(Possehl 1999; Seth *et al.* 2007)。その中でも北西部にあるカディール島に所在するドーラーヴィーラー (Dholavira) 遺跡はこの地域で最大規模を有する遺跡である (Bisht 1991, 1998, 2005)。1990～2005年にかけて実施された発掘調査によって、この遺跡が計画的なプランをもつ遺跡であることが確認されている。城塞部のほかに市街地や大規模な貯水槽があり、モヘンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡を代表とする城塞・市街地分離型のプランとは異なる一体型のプランである。また、発掘調査によって複数箇所のビーズ生産工房が確認されており、工芸品生産の拠点であった可能性が高い。

また、カンメル遺跡の北東 20km ほどのところには 1971～72年に発掘調査が実施されたスールコートダ (Surkotada) 遺跡が所在する (Joshi 1990)。この遺跡は城塞部と市街地を接続させて配したプランを有しており、分離型と一体型の折衷型ともいえるであろう。このほか、パーブマート (Pabhumath) 遺跡 (IAR 1977-78, 1978-79, 1980-81) やジュニー・クラン (Juni Kuran) 遺跡 (Prmalik 2004)、デーサルプル (Desalpur) 遺跡 (IAR 1963-64) などでも発掘調査が行われており、カッチ地方のインダス遺跡の様相が断片的ながらも明らかにさ

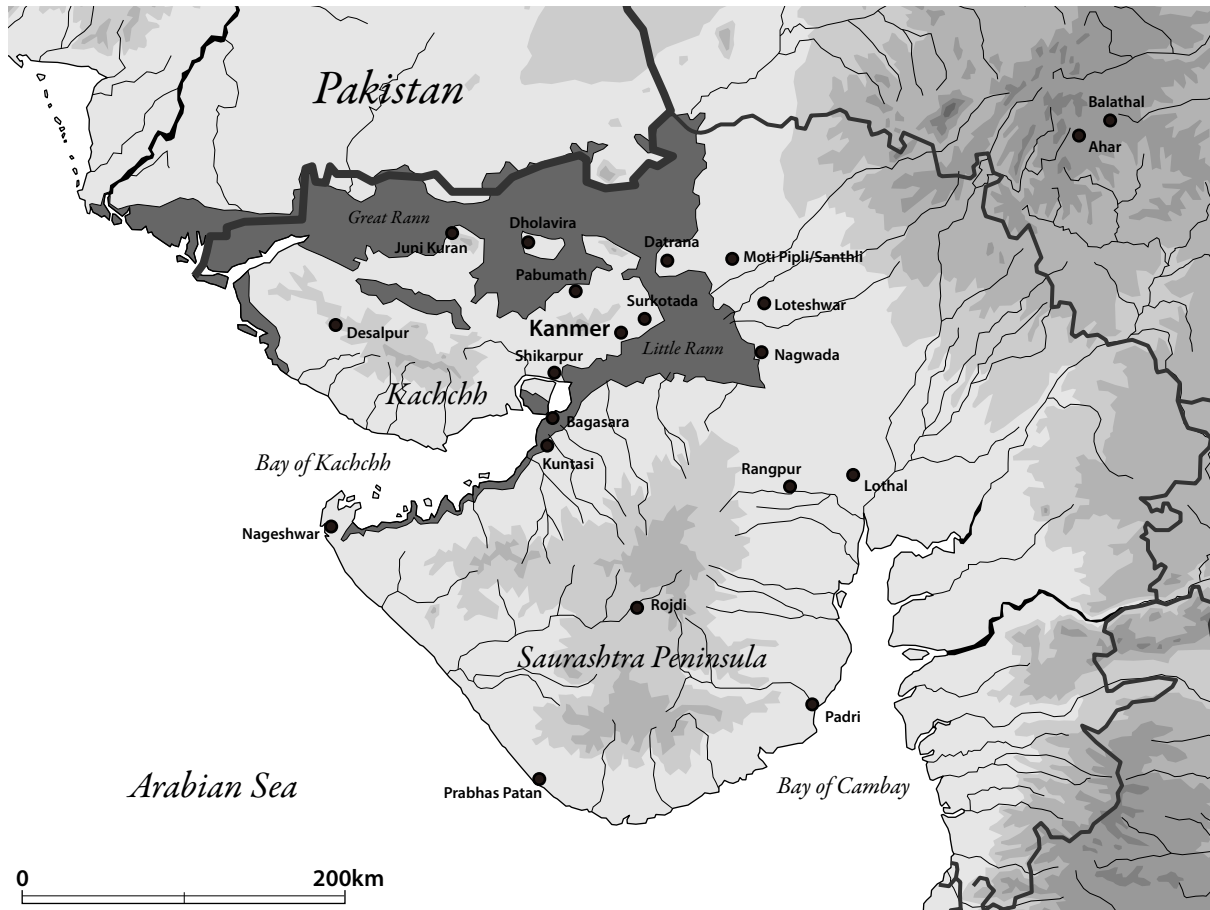


図2 グジャラート地方における代表的なインダス遺跡

れている。

カッチ地方は、インダス文明社会の中心地域であるシンド地方とインド半島部をつなぐとともに、アラビア海にも接続する陸海双方の交通の要衝と考えられるところである。また、石製装身具に用いられた各種石材の産地であるグジャラート地方のインダス文明社会における役割を考える上でもきわめて重要な地域である。

文化時期区分

カーンメール遺跡では発掘調査の結果、層序と出土遺物の検討から以下のような文化時期区分が設定されている。

- I 期 先インダス文明期
- II 期 インダス文明期
- III 期 インダス文明期終末～ポスト・インダス文明期 (?)
- IV 期 歴史時代（古代）
- V 期 歴史時代（中世）

I 期はマウンド中央部に設定された Y30 発掘区の深堀トレンチ最下層において確認されており、いわゆるアナルタ土器伝統（Anarta Tradition）に関する土器が出土している。ハラッパ一式土器とは明確に異なる特徴を有する土器群であり、グジャラート地方において広く分布が

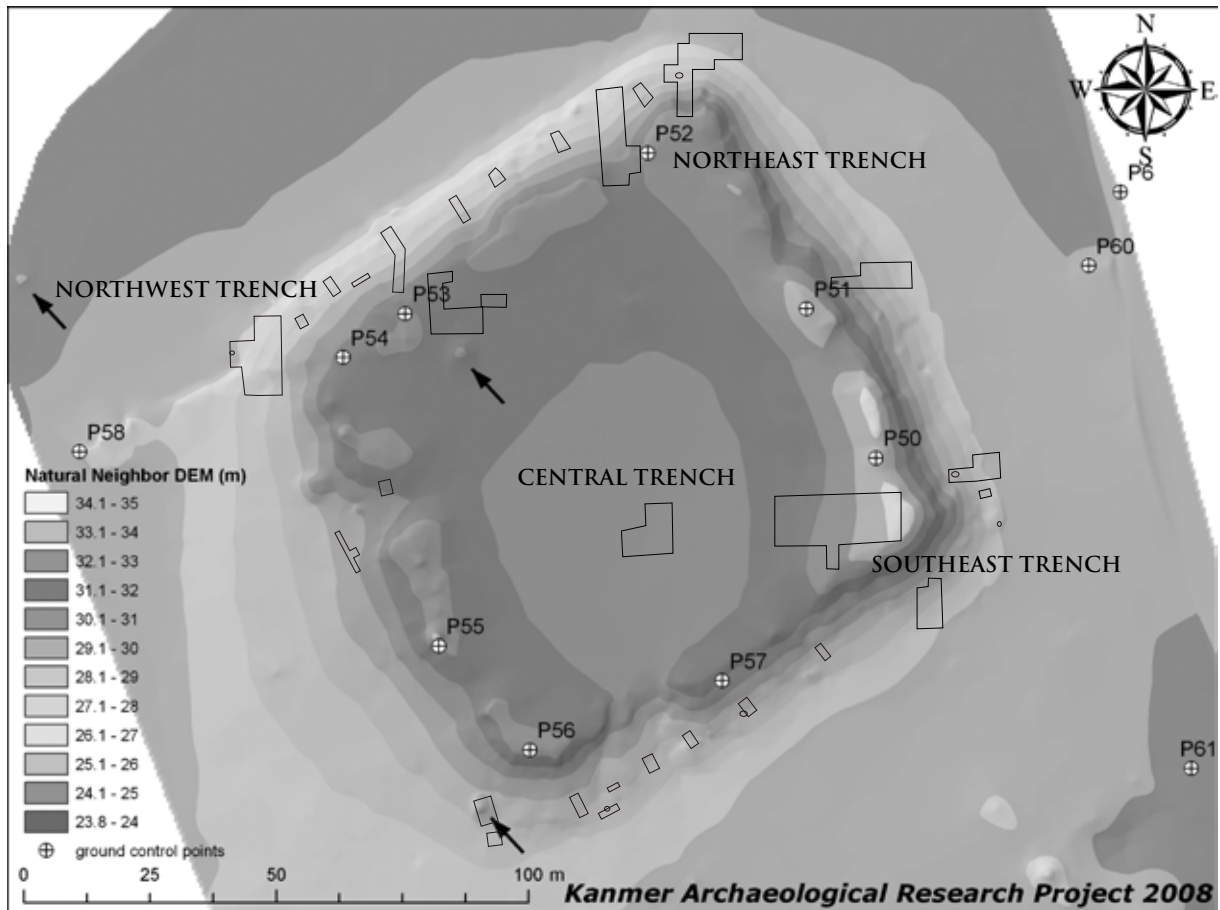


図3 カーンメール遺跡平面図

知られている。ただし、カーンメール遺跡では上位のII期の層との間に無遺物層は存在しておらず、混入の可能性はあるものの、アナルタ式土器とともにわずかながらハラッパー式土器が出土している。このことは、少なくともカーンメール遺跡においては両者が近接した時期的関係にあったことを示唆している。

II期は約3mの厚さを測る包含層からなる。出土土器の検討からIIA期とIIB期の2時期に細分されている。IIA期はソーラト・ハラッパー式土器 (Sorath Harappa pottery) を主体として、ハラッパー式土器が少量混じるという組成をなす。IIB期になると、黒縁赤色土器 (Black-and-Red Ware) と砂粒混粗製土器 (Gritty coarse ware) が新たに組成に加わる。

III期にはソーラト・ハラッパー式土器、スリップ搔落文土器 (Reserved Slip Ware)、黒縁赤色土器など、II期に共通する土器が出土しているが、全体的に胎土や表面調整の点で粗製化が認められる。

IV期は西暦紀元前後に属する。アンフォラや赤色磨研土器 (Red Polished Ware)、ラング・マハル式土器 (Rang Mahal pottery, Rydh 1959) に関係するとみられる彩文土器が出土する。マウンド各所の発掘区においてこの時期の遺物が出土している。V期は中世期に属し、特にマウンド南東区の発掘区においてIII期の遺構を破壊する形で掘削された数多くの土坑がこの時期に属する。

発掘調査の成果

2005～2007年度の調査では、マウンド縁辺部の調査を中心に発掘調査を実施し、マウンド



図4 カーンメール遺跡北東調査区 石積周壁

中央部では2ヶ所で狭小なトレンチを設定した（図3）。

マウンド北東隅、北西隅、南東隅に設けられた発掘区においては、石積みの周壁がマウンドを囲繞していることが確認された（図4）。周壁には3段階に及んで構築されており、第1段階の周壁の外面に接するかもしくは近接して第2段階の周壁が構築される。第2段階の周壁の規模は南北約110m、東西約114mで、幅は最大20mにも及ぶ可能性がある。第3段階の周壁は第2段階までの周壁の上面に構築されている。周壁の使用石材は遺跡周辺に露頭する砂岩・石灰岩で、石材は大きなもので2×1mを測り、石材の切り出しから運搬、積み上げにいたるまでの技術体系の復元が必要である。

出土遺物の検討から、周壁はインダス文明期^(註1)を中心とする時期（II・III期、前3千年紀後半～前2千年紀初頭）のものと推定され、遺跡全体の規模は小さいながらも堅固な周壁をめぐらせている点はこの遺跡がカッチ地方の拠点の一つであった可能性を示唆している。なお、周壁は歴史時代にいたっても露出していた可能性が確認されている。

また、南東隅の発掘区ではII期の石積周壁に接するようしてIII期の石積住居建物群が検出されている。マウンド縁辺の最高部からマウンド中央に向かって傾斜面が形成されているが、その傾斜面に平行するかたちで遺構が検出されているが、石積壁の上面および床面の標高からみて5面前後の遺構が中央から縁辺部に向かって重層していると考えられる。すなわち、時期が新しくなるほど、縁辺部に向かって遺構が築かれていることを意味しており、III期末の遺跡の廃絶過程を考える上で重要な点である。

中央部の発掘区においては、I期からIV期にかけての文化層が確認されている。IV期に由来する大形土坑や溝状遺構がIII期以前の文化層序を著しく攪乱しているが、II期およびIII期

の石積建物遺構と道路状遺構が検出されている。最下層においては、地山を形成する岩盤の直上に I 期の文化層が限定的ながら確認されている。

出土遺物には凍石 (steatite)、紅玉髓 (carnelian)、瑪瑙 (agate)、碧玉 (jasper)、ファイアンス (faience) を用いたビーズのほか、インダス式印章を押捺した粘土塊、褐色チャート製おもり、貝製腕輪、石刃製収穫具などが出土している。銅製品も出土しているが用途の特定できる資料はない。

石製収穫具としたのは石刃石器であるが、カーンメール遺跡ではシンド地方のローフリー丘陵 (Rohri Hills) 産と推定される褐色チャートと、カッチ地方在地産の瑪瑙を用いたものが出土している。両者は素材だけでなく、石刃のサイズにおいても明確な違いがあり、後者はマイクロ・ブレードと呼ぶべき小形のサイズを特徴とする。前者の褐色チャート製石刃は使用時の着柄の際に意図的に切断されているため、石刃剥離時のサイズは不明であるが、全長 10cm を越える大形石刃と推定される。こうした異なる素材・サイズを特徴とする 2 つの石刃石器群の存在は、シンド地方との関係における遠隔型流通システムと在地の石材を使用した在地型流通システムが併存していることを示している。

紅玉髓製ビーズに関しては、剥離によって成形された未穿孔ブランクが出土しており、ビーズ生産の一端にかかわる作業が行われていたことがわかる。ビーズ生産に関する遺物として、アーネスタイト製穿孔具も出土している。また、貝製腕輪に関しても海産性貝の芯が出土しており、素材を搬入しての製作行為の存在が明らかである。

凍石に関しては原産地が不明であるが、紅玉髓は東方約 230km にあるキャンベイ湾近郊に一大産地があり、また瑪瑙はカーンメール遺跡が立地するリトル・ラン周辺で産出することが知られている。また、腕輪に用いられた海産性貝は南のサウラーシュトラ半島周辺の海岸地帯で採取される巻貝である。

周辺の遺跡からみたカーンメール遺跡の位置づけ

本節ではカーンメール遺跡の出土資料について、今後の研究課題をまとめ、インダス文明研究における位置づけを仮説として提示することとしたい。

ここで取り上げるのは、筆者自身が検討の機会をもった土器資料を中心とし、先インダス文明期のいわゆるアナルタ式土器、インダス文明期のソーラト・ハラッパー式土器、インダス文明期からポスト・インダス文明期にかけての黒縁赤色土器である (図 5)。

アナルタ式土器

ここでいうアナルタ式土器とは、グジャラート北部の調査成果に基づいて、P. アジートプラサードが「アナルタ土器伝統」と呼んだものである (Ajithprasad 2002)。アナルタとはグジャラート北部の伝統的な地域名称である。

アナルタ式土器の設定は、グジャラート地方北部のローテーシュワル (Loteswar) 遺跡、モーティ・ピープリー (Moti Pipli) 遺跡、ナーグワダー (Nagwada) 遺跡などの出土資料をもとに行われている (Ajithprasad 2002)。壺・鉢類を主要器種とし、赤色系のスリップ上に黒色の平行線によって文様帯を区画し、単純な幾何学文を充填するという特徴がある。また、文様帯内に白色顔料を塗彩するのも一般的である。製作技法の上では低速回転を利用するか、もしくは回転力を利用しない成形・調整技法を特徴とし、器表面をミガキ調整で仕上げるものが多い。

若干の ^{14}C 年代測定によると、前 4 千年紀から前 2 千年紀前半に位置づけられるが (Ajithprasad

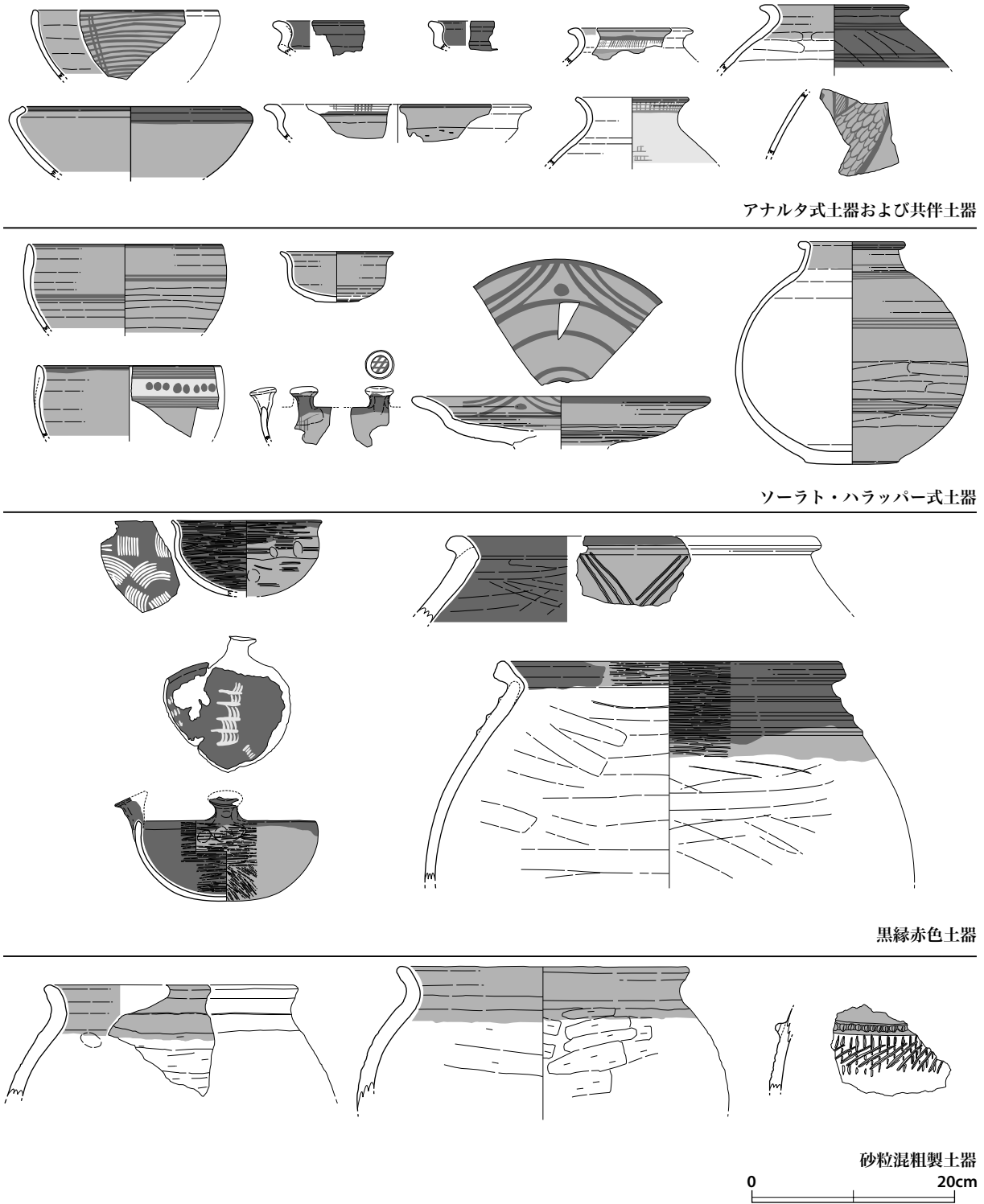


図5 カーンメール遺跡出土土器

2002; Patel 2008)、ナーグワダー遺跡やシカルプル（Shikarpur）遺跡の出土資料を瞥見する限り（註²）、インダス文明期にもグジャラート地方在地の土器として存続していた可能性が高い。

現在確認・公表されているデータにもとづく、グジャラート地方北部に多くの遺跡が分布しているが、サウラーシュトラ半島東端部に位置するパドリー（Padri）遺跡（Shinde 1992; Shinde and Kar 1992）の先インダス文明期の文化層から相同の土器が出土しており（註³）、その分布範囲は当初想定されたグジャラート地方北部にとどまらず、広くグジャラート地方に分布し

ている可能性が高い。

カーンメール遺跡では、アナルタ式土器に共通する特徴をもつ土器資料が地山層直上から出土している。ローテーシュワル遺跡やモーティ・ピープリー遺跡に類例をもつ彩文土器のほか、斜位文様帯内に魚鱗文を充填するという他に例をみない資料も出土している。

問題は上位のインダス文明期の文化層との間に無遺物層を挟まないカーンメール遺跡のアナルタ式土器出土層の形成年代である。上述のように、アナルタ式土器は前4千年紀以降、グジャラート地方の在地系土器として展開したことが推測されるが、それだけ長期間に展開したとなれば、当然、形態や彩文の変化が生じていたであろうことが想定される。グジャラート地方北部では同地方の堆積環境および遺跡形成過程の諸要因ゆえに層位的にアナルタ式土器が検出された例はない。現地表面に近いところでの薄い包含層からの出土であり、出土層位と型式分類を併用して変化を捉えることは難しい状況にある。

こうした状況ゆえに、アナルタ式土器の変遷は十分に理解されておらず、カーンメール遺跡出土資料の年代、すなわちインダス文明期との時期的な遠近は不明である。インダス文明期の文化層との間に無遺物層が存在しないことを積極的に評価すれば、前3千年紀前葉の初期ハラッパー文化段階に位置づけられる可能性が浮上するが、その可能性を傍証する情報に乏しい。インダス文明期におけるアナルタ式土器とハラッパー式土器の関係は、グジャラート地方のインダス文明社会への編入過程を考える上できわめて重要な検討課題であり、ひいてはカーンメール遺跡の評価を考える上でも重要な手掛かりとなるであろう。

グジャラート地方の在地の土器としてアナルタ式土器を位置づけたときに注目されるのは、同地方北部において確認されているシンド・バローチスターン系土器の存在である (Ajithprasad 2002)。モーティ・ピープリー遺跡、ナーグワダー遺跡、サントリ (Santhli) 遺跡において確認されているもので、明らかにアナルタ式土器とは異なる特徴をもつ。鏝付広口短頸壺やピーカー形土器など、アナルタ式土器にはみられない器種を含むのが特徴で、成形・調整技法の点においても高速回転を利用するといった特徴をもつ。ナーグワダー遺跡では埋葬行為に関わるとみられる土器埋納坑からの一括出土である。すでに P. アジートプラサードらによってシンドもしくはバローチスターン高原南部の土器 (特にバーラーコート (Balakot)) との比較が行われている。完全に相同ではないものの、器形的特徴から判断して、シンド・バローチスターン高原方面との関連性が首肯される資料である。

前3千年紀前葉の初期ハラッパー文化段階に位置づけられる可能性がきわめて高く、この時期に外部からの移住もしくは往来を伴う交流ネットワークが存在したことを示唆している。初期ハラッパー文化段階の特に後半期 (前2700～2600年前後) にはシンド地方を中心とした交流ネットワーク・システムの再編が生じた可能性があり、グジャラート地方北部がそうしたネットワーク・システムの中に取り込まれつつあったことを物語っているといつてよいであろう。こうした初期ハラッパー文化段階における外来系土器とアナルタ式土器の関係については判然としないが、インダス文明期におけるグジャラート地方の状況を理解する上できわめて示唆的な現象である。

ソーラト・ハラッパー文化

「ソーラト・ハラッパー文化」という名称は、ペンシルヴァニア大学とグジャラート州政府考古局の共同によるロージディー (Rojdi) 遺跡の発掘調査成果に基づいて提唱されたものである。

インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査（上杉）

		Harappa	Kachchh			North Gujarat			Saurashtra						
			Kanmer	Dholavira	Surkotada	Loteshwar	Moti Pipli	Nagwada	Rojdi	Lothal	Rangpur	Nageshwar			
Late Harappan		?													
		5											III		
Harappan	Late	(1800 BC?) 4	?		?										
		(1900 BC)	III											IIC	
	Middle	3C		IIB	VI									IIB	
		(2200 BC)													
		3B		IIA	V									IIA	
		(2450 BC)													
	Early	3A			III										
		(2600 BC)		I											
					II										
		2													
Pre-/Early Harappan	(2800 BC)			I											
	1														

図6 グジャラート地方における編年試案

本編年表は報告書に出版された土器を中心に各遺跡で設定された文化時期の併行関係を示したものである。南アジア考古学においては遺跡での文化時期の設定に際して、出土遺物よりも遺構面、特に煉瓦積み・石積建築遺構の重複関係を重視する傾向にあり、各期の始まりと終末に関して遺物編年とは整合しない場合が多い。また、報告書では各期を特徴づける建築遺構に伴う層序を一括して報告するため、ある時期の建築遺構に数面の遺構面と整地層が伴う場合、それぞれに対応する遺物を把握することは容易ではない。したがって、本編年表は厳密な併行関係を示すものではなく、図示された資料をハラッパー遺跡編年に大まかに対応させたものとして受け止められたい。また、インダス文明期（ハラッパー文化併行期）とポスト・インダス文明期（後期ハラッパー文化期）の区別も研究者によって異なっており、本編年表でも時期区分の一貫性を欠く結果となっている。今後解決すべき問題を提示することを試みたものと理解されることを望む。なお、左から2列目は典型ハラッパー式彩文土器の検討による時期区分である(Quivron 2000; 上杉・小茄子川 2008)。第16図も同様である。

る (Possehl and Herman 1990; Possehl and Raval 1989)。サウラーシュトラ半島の中央部に位置するロージディー遺跡では発掘調査の結果、シンド地方やパンジャブ地方のハラッパー文化とは異なる内容をもった物質文化の存在が明らかにされた。とりわけ土器における差異が明示され、それとともに各種ミレットの存在やインダス印章の不在、建築物における差異が地域文化の存在を示す証拠として挙げられている。

このソーラト・ハラッパー文化は G.L. ポセール (Possehl) が提唱するインダス文明社会の領域 (domain) 概念の一つを構成するものである (Possehl 2002)。領域概念は、強い斉一性がインダス文明社会の特徴と考えられていた研究動向に対し、地域性の存在を強く打ち出したものである。しかしながら、いかにして領域を設定するのかという点において方法的課題が存在し、また領域が固定的なものとして説明される傾向において疑問点がある。

ソーラト・ハラッパー文化はそもそも土器にみられる地域性において提唱された地域文化の枠組みである。ところが、その範囲がどこまで及ぶのかについては明確な議論がなされていないのが現状である。サウラーシュトラ半島が漠然とした領域として考えられているようだが、ロージディー遺跡と同じ内容の土器組成はカーンメール遺跡も含めてカッチ地方にもみることができる。

ロージディー遺跡では精製土器群と粗製土器群に大別され、精製土器では赤色スリップ地に平行線文を特徴とする黒色彩文を施した土器が主体をなし、粗製土器には黒縁赤色土器や砂粒混粗製土器が含まれる。カーンメール遺跡では、前者の精製土器が IIA 期以降存在し、後者の粗製土器が IIB 期に加わるという組成の上での時期的変化を示しており、ロージディー遺跡で一体と考えられた精製土器群と粗製土器群がはたして一つの土器伝統に属するののかという問題を提起している。

黒縁赤色土器の問題に関しては次節において取り上げるが、精製土器群を代表する赤色地黒色彩文土器と粗製土器群を代表する黒縁赤色土器・砂粒混粗製土器は器種構成・器形・成形技法・表面調整・焼成技法の各点において明確な断絶的差異が認められる。すなわち、仮に一つの遺跡で両土器群がともに生産されていたとしても、その生産体制は別個に存在していると考えるのが妥当であろう。

そのように考えたとき、少なくとも土器の上ではソーラト・ハラッパー文化を特徴づける土器は一つの土器伝統に属する所与のものとして理解するのではなく、別個の土器伝統がインダス文明期のある時期に接点をもつようになったと考える方が、グジャラート地方の様相を理解する上で適切な仮説を提起できるであろう。

そこで、ここでは一つの検討課題を提起する意味で、これまで一つの土器伝統として理解されてきた精製土器群と粗製土器群を別個の土器伝統を構成するものとして理解し、前者のみをソーラト・ハラッパー式土器として位置づけることとしたい。というのも赤色地黒色彩文土器がよりシンド地方の典型ハラッパー式土器に近い特徴を有しており、典型ハラッパー式土器に関連する可能性が考えられるためである。

カーンメール遺跡出土のソーラト・ハラッパー式土器をみると、半球形鉢、広口短頸壺、小形鉢によって構成される。いずれも製作工程のある段階において高速回転を利用し、表面を平滑に仕上げるといった特徴をもち、底部は平底もしくは若干膨らみのある平底を呈する。また、胴部下半を浅いヘラケズリによって仕上げるのも製作技法上の特徴である。

黒色彩文による平行線文が各器種の胴部を中心にめぐらされる。壺の場合は平行線文のみであるが、半球形鉢の場合は胴部上半に平行線文で文様帯を区画し、円文を充てんした例も存在する。また、半球形鉢の文様帯に白色彩文を施した例もある。

高速回転を利用した表面調整およびヘラケズリ調整といった製作技法上の特徴や、一部の器形においては、典型ハラッパー式土器との類似性を示しているが、一方では器種構成における明確な差異も認められる。特にソーラト・ハラッパー式土器において主体的に出土する半球形鉢は、典型ハラッパー式土器には現れることのない器種である。また、彩文の点においても典型ハラッパー式土器にみられる形象文が、少なくともソーラト・ハラッパー式土器の前半期には認められない点も注目される。

製作技法における特徴は先行するアナルタ式土器には認められず、在地の土器伝統では理解することができない。一方、器種構成や彩文の違いは典型ハラッパー式土器を祖形としてソー

ラト・ハラッパー式土器が誕生した可能性を強く否定している。こうした共通性と差異を説明する一つの仮説としては、インダス文明期にシンド方面からハラッパー文化の影響が直接的・間接的に及ぶ中で、典型ハラッパー式土器の製作技法の伝統を継承しつつ、器種構成や彩文の上で地域性の強い土器様式としてソーラト・ハラッパー式土器が生成した可能性を指摘することができるであろう。

このように考えたとき、ソーラト・ハラッパー式土器がいつ成立したのかという問題が生じる。従来、ソーラト・ハラッパー式土器はインダス文明後半期にグジャラート地方の地域型として成立したとの理解が一般的であったが、ロージディー遺跡やロータル遺跡で採取された試料の¹⁴C年代測定によって、ソーラト・ハラッパー式土器がインダス文明期初頭もしくは前半期にまでさかのぼる可能性が示唆されている。一方で、ソーラト・ハラッパー式土器の成立時期を従前どおり新しく見積もる考え方も根強い。¹⁴C年代測定値に依拠した年代論は、土器の出土層位と型式学的検討とともに吟味されるべきであり、出土土器の十分な検討のないままに測定値による年代論が独り歩きする状況は混乱を招くだけであろう。

総合的かつ整合的な理解が求められるところで、単に一つの遺跡の出土資料のみならずグジャラート地方各地の資料の集成と体系的な分析が必要であり、ソーラト・ハラッパー式土器の成立過程とその年代の問題は今後の重要課題であることを強調しておきたい。

黒縁赤色土器

黒縁赤色土器とは内面および外面上半部が黒色、外面下半部が赤色を呈する土器で、黒色土器の一部をなすものである。焼成時に炭素を表面に吸着させて黒色に発色させるという意図的な焼成技法による。

この黒縁赤色土器は古くから南アジア考古学の研究課題の一つとなってきた。というのも、この土器がインダス川流域を除く南アジア各地に分布するため、その分布の背後に系統的な関係性が存在するのかどうか、ときには「アーリア人」の拡散とも関連づけて検討が行われてきた。現在、その系統性に関する研究はかつてほど盛んではないが、南アジア各地の黒縁赤色土器を多元的発生とするか系統的拡散として理解するか、依然として重要な研究課題である。

南アジアの黒縁赤色土器の分布とその出現時期をみると、大きく以下のように分類することができる。

- 1) 先インダス文明期からポスト・インダス文明期　グジャラート地方
- 2) 先インダス文明期からポスト・インダス文明期　アラヴァリー山脈
- 3) ポスト・インダス文明期　デカン高原北部（中央インド）
- 4) ポスト・インダス文明期　東インド
- 5) 先インダス文明期から初期歴史時代　ガンガー平原
- 6) 鉄器時代および初期歴史時代　インド半島部（南インドを含む）

このように、南アジアのほぼ全域を覆うようにして黒縁赤色土器が分布するが、それぞれの地域でその歴史的・文化的脈絡は異なっている。また、ガンガー平原のようにきわめて長期にわたって黒縁赤色土器が存在する地域もある。こうした状況を認識するとき、単に色調分布の上ですべての地域の黒縁赤色土器を一括することは不可能で、地域・時代ごとに分析を進めて

いく必要があることはいうまでもない。

上記の 1) に属するカーンメール遺跡では IIB 期と III 期に黒縁赤色土器が出土しているが、上述の通り、ソーラト・ハラッパー式土器とは明確な差異がある。黒縁赤色土器の場合、低速回転による調整が施されるものの、原則として回転力を利用しない成形技法による。器表面には凹凸が目立ち、口縁もまた直線を呈さない。また、器表面をヘラミガキ調整によって仕上げるのも、黒縁赤色土器の特徴である。

器種構成の点では、胴部に屈曲部をつくり外反する口縁をもつ鉢と外面肩部に隆帯をめぐらす広口短頸壺が主体をなす。また鉢の場合、内面に白色彩文による平行短線文を多段に施す例が存在する。

こうした特徴は、スールコータダー遺跡で出土している黒縁赤色土器と共通しており、それがインダス文明期の後半からポスト・インダス文明期に出土するという点においても、同一の歴史的・文化的脈絡をもつと考えてよいであろう。雲母混土器やソーラト・ハラッパー式土器の半球形鉢にみられる逆円錐形把手が黒縁赤色土器においても断片的ながらに存在する点は、黒縁赤色土器とソーラト・ハラッパー式土器、雲母混土器といったグジャラート地方在地の土器との時期的併行関係および相互関係を明らかにしている。

ここで問題となるのは、インダス文明期のグジャラート地方における黒縁赤色土器の起源であろう。アナルタ式土器およびソーラト・ハラッパー式土器の双方と異なる器種構成・器形・表面調整技法をもつことから、仮に一遺跡で判出するとしても単一の土器伝統に含まれるとは考えにくい状況にある。とすれば、別個の起源をもつと考えるべきである。

かつて黒縁赤色土器はアラヴァリー山脈中に展開したバナース文化 (Banas Culture) に特徴的な土器として認識されていたが、近年の調査でグジャラート地方北部やサウラーシュトラ半島にも先インダス文明期において黒縁赤色土器が存在することが明らかとなっている。ここで浮上するのは、黒縁赤色土器の分布に一元的発生を想定するのか、多元的発生を想定するのかという問題である。これは先に述べた汎南アジア的分布をもつ黒縁赤色土器に常に付随する問題であるが、グジャラート地方の前 4 千年紀から前 3 千年紀という限られた時間・地域的範囲においても生起する問題である。

現在の先インダス文明期のグジャラート地方における黒縁赤色土器の出土例が数量的にきわめて限定されること、またアラヴァリー山脈中においても前 4 千年紀にさかのぼって黒縁赤色土器が主体的に存在することからみると、多元的発生よりも一元的発生の可能性が高いように思われる。あるいはアラヴァリー山脈が黒縁赤色土器の中心地を形成しつつも、南のグジャラート地方北部やサウラーシュトラ半島との交流ネットワークが存在し、それを介して黒縁赤色土器が各地の土器伝統の中に客体的に浸透していった可能性が考えられるであろう。

前 3 千年紀後半のグジャラート地方における黒縁赤色土器をみる限り、鉢・壺形土器を主体とし、鉢には白色彩文が施される点から判断して、アラヴァリー山脈中の黒縁赤色土器と深い関係が存在したであろうことが推察される。さらには広くカッチ地方やサウラーシュトラ半島に分布することから考えて、インダス文明期の特に後半期以降にはアラヴァリー山脈とグジャラート地方との関係が強化された可能性を想定することができるであろう。

アラヴァリー山脈方面との交流の強化がグジャラート地方のインダス文明社会にどのような影響を及ぼしたのかは不明である。しかし、インダス文明後半期の社会構造の変化や文明社会の衰退を視野に入れたとき、この交流関係の強化は看過できない問題となろう。グジャラート

地域における交流システムの変化は、インダス文明全体に関わる社会変容の一端をなす可能性を考慮しつつ検討を進めていく必要がある。

3 ガッガル川流域・ハリヤーナー州における調査

カーンメール遺跡の発掘調査と併行してデカン大学（Deccan College）のヴァサント・シンデー（Vasant Shinde）を調査担当者として、インド北西部をヒマラーヤ山脈からインダス平原へと流下するガッガル川流域におけるインダス遺跡の調査を計画した。

この地域はかつてよりインダス文明前後の遺跡の密集地帯として知られ、中にはその遺跡の密集度を高く評価して、インダス文明社会におけるガッガル川流域の重要性を主張する説も多い。さらに、このガッガル川をヴェーダ文献に登場するサラスヴァティー川（詳細は本書掲載の後藤敏文・山田智輝・永ノ尾信悟論文を参照のこと）に同定して、インダス＝サラスヴァティー文明と呼ぶ研究者もいる（Gupta 1996）。

ところが、この地域ではいくつかの遺跡で調査が行われているものの、その成果は十分に公表されておらず、インダス文明社会におけるその位置づけを把握することがきわめて難しい状況にある。そこで、ガッガル川流域における調査を計画し、遺跡分布調査を行った上で発掘調

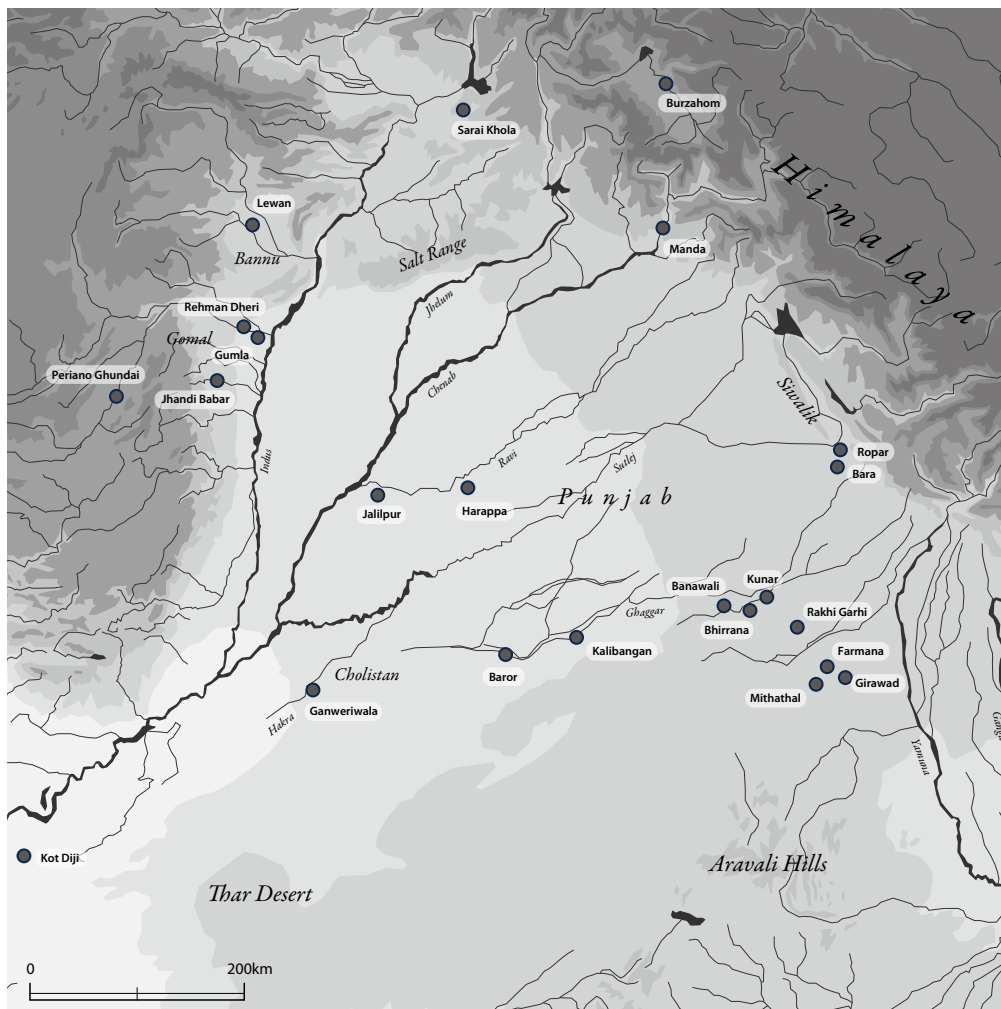


図7 パンジャーブ平原における代表的な遺跡の分布

査を実施することとした。

ガッガル川流域の文化的環境

パキスタン・インドにまたがるパンジャブ平原の東半部には、ガッガル・ハークラー川とその支流が北東のヒマラーヤ山脈から南西のシンド地方に向かって流下している。このガッガル・ハークラー川流域は次節で述べるチョーリスターン地方も含めて遺跡分布の稠密地域である。先インダス文明期からインダス文明期、そして文明衰退後のポスト・インダス文明期、さらには初期歴史時代にいたるまで多くの遺跡が分布する。

ガッガル・ハークラー川流域のうちインド領内においては、その西半部にあたるラージャスターン州北部にカーリーバンガン (Kalibangan) 遺跡 (Lal *et al.* 2003) が知られ、東半部のハリヤーナー州域でもバナワーリー (Banawali) 遺跡 (Bisht 1982; Bisht and Asthana 1979) やラーキー・ガリー (Rakhi Garhi) 遺跡 (Nath 1998, 1999, 2001) などの拠点遺跡が確認されている。

また、1990年代以降のクナール (Kunal) 遺跡 (Khatri and Acharya 1995) およびビッラーナー (Bhirrana) 遺跡 (Rao 2004, 2005, 2006) の発掘調査で、パンジャブ地方東部における文化編年構築の上で重要な情報が蓄積されつつある。これらの遺跡の調査を通して、この地域が前4千年紀以降に東西両方向の地域とネットワークを形成しながら初期ハラッパー文化段階、インダス文明期、さらにはポスト・インダス文明期にかけて重要な地域として展開したことが明らかになりつつある。

この地域の文化編年の確立とハラッパー文化期の地域社会の様相を明らかにするべく、ハリヤーナー州ローフタク近郊での調査を実施している。発掘調査の対象としたのはファルマーナー遺跡、ギラーワル遺跡、ミタータル遺跡である。そのうちギラーワル遺跡の発掘調査は2007年4月に終了し、現在発掘調査報告書を作成中である。ファルマーナー遺跡を調査の中心に据え、先インダス文明期からポスト・インダス文明期にかけての文化層序が確認されているミタータル遺跡においてトレンチ調査等の補足調査を実施することによって、上記の目的を達成できるよう調査計画を策定している。

ギラーワル遺跡の調査

ギラーワル遺跡 (28°58'41"N, 76°28'48"E) は道路建設のためにすでに削平が著しく進行しており、発掘調査前の段階においてすでに地表面に遺構が露呈しているという状態であった。土地の所有者が農地として利用したいとの意向をもっていることから、協議の上で記録保存を目的とした緊急発掘調査を2007年4月実施した。遺物の散布にもとづいて推定される遺跡の面積は8ヘクタールで、道路の南北に及んで遺構が地表面に露呈している。

発掘調査の結果、竪穴住居の可能性をもつ大形土坑や廃棄土坑、貯蔵用土坑、土器焼成窯などが検出されている (図8)。発掘調査面積は650m²であるが、遺構は稠密に分布しており、一定期間に及んで利用された結果の遺構分布と考えられる。

出土遺物は大量の土器と、若干の銅器、石器、骨器が出土している。出土土器にはハラッパー式土器は含まれず、チョーリスターン地方のハークラー式土器やパンジャブ地方西部の北方型コート・ディジー式土器に類似するものが出土していることから、前4千年紀後半から前3千年紀前葉 (初期ハラッパー文化段階) に位置づけられる。ただし、主体となるのは在地系土器と考えられる黒色帯土器群である。壺・鉢類から構成され、技法的には器表面のミガキ調

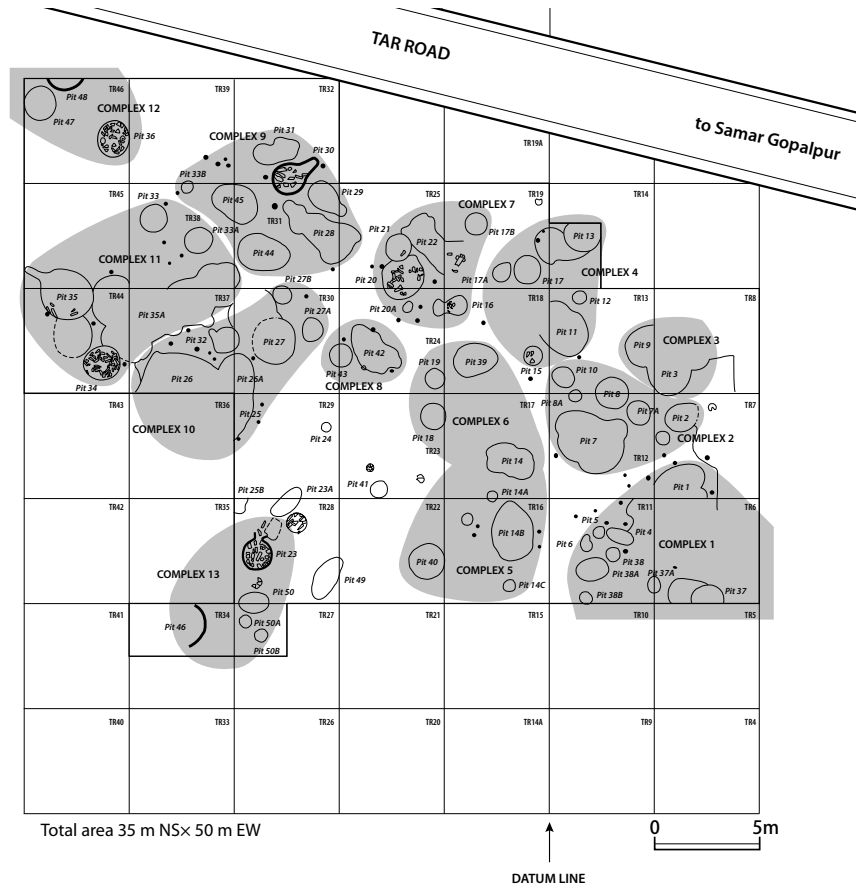


図8 ギラーワル遺跡 遺構平面図

整を特徴とする。この種の黒色帯土器はパンジャブ地方東部に広く分布するが、先インダス文明期からインダス文明期を経てポスト・インダス文明期にまで続く在地の土器伝統である。

ファルマーナー遺跡の調査

ファルマーナー遺跡はギラーワル遺跡の北西 18km のところにある遺跡で (29°2'23"N, 76°18'26"E)、遺物分布による推定遺跡範囲は 18 ヘクタールを測る。すでに農地として利用されており、現地表面から 10cm 程度で遺構が検出される状況である。

遺物分布域の中で低平なマウンド状を呈する部分を中心に発掘区を設定し、調査を開始した(図 10)。2006 年度と 2007 年度の 2 ケ年にわたって東西 35m、南北 35m の範囲で発掘を実施したところ、面的に日干煉瓦積建物が広がっている状況が確認された(図 11)。発掘の東半部に幅 4m 前後の街路が南北に延び、この街路から東西方向の小路が派生して建物群を区画している。大別して 3 群に分かれる建物群からなり、中央に位置する建物では中庭状の広い空間に狭い部屋からなる部屋列が組み合わさるという構成を示している。この中庭+部屋列という構成はモヘンジョダロ遺跡の市街地で検出された建物群と原理的に共通している。部屋内では平面矩形の炉跡や大甕を埋設した貯蔵施設が検出されており、一般の居住空間と判断してよさそうである。出土資料の分析が十分に進んでいない現状にあつては断定はできないが、現時点では工房空間は確認されていない。このマウンド域では同じ面で同様の煉瓦積建物が埋没している可能性が高く、今後の調査でその範囲の特定が必要である。

出土遺物についてみると、凍石製インダス印章 2 点、印章を押捺した封泥状粘土塊 1 点、同

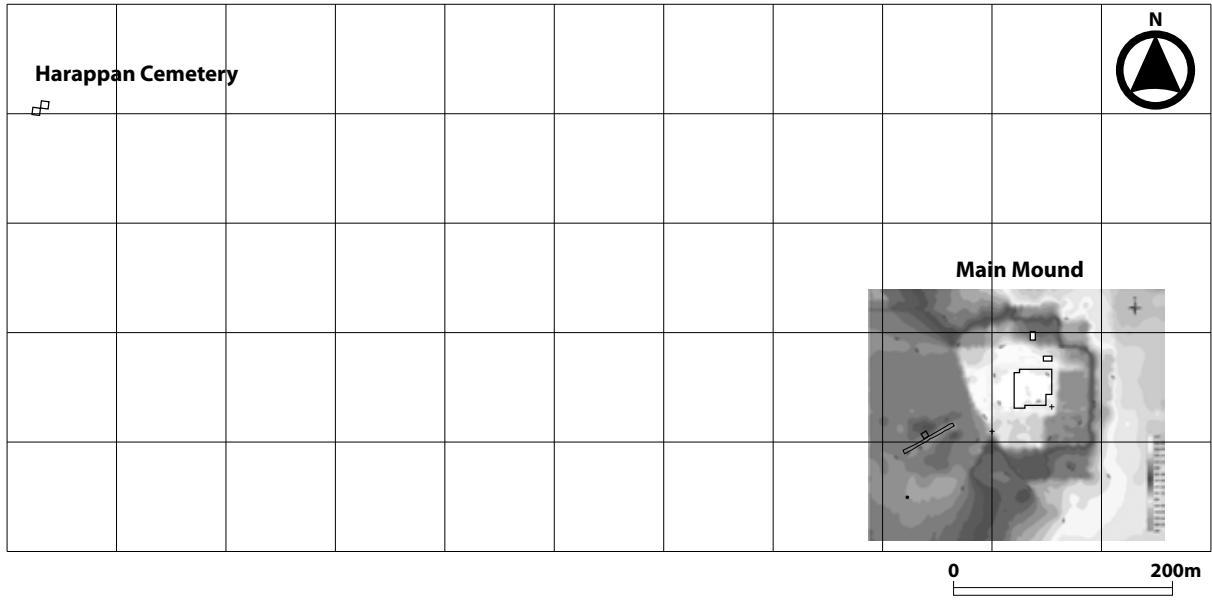


図9 ファルマーナー遺跡 主マウンドと墓地の位置関係

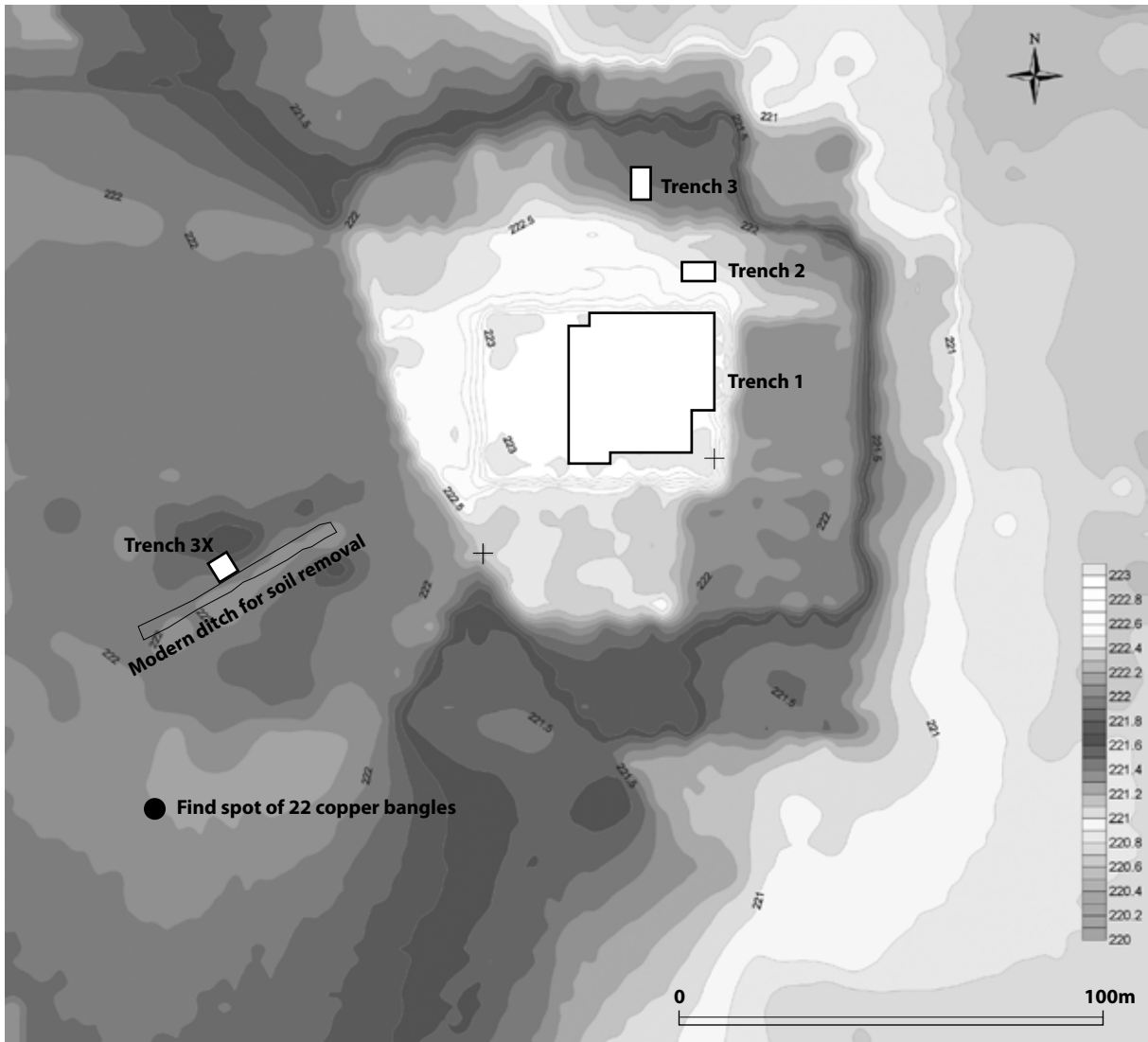


図10 ファルマーナー遺跡 主マウンド地形測量図および発掘区配置図



図 11 ファルマナー遺跡 主マウンド調査区 遺構平面図

じく印章を押捺したペンダント状土製品 1 点のほか、紅玉髓および凍石を中心とした装身具類、鏝・槍先などの銅器・銅製品、穀物製粉用と考えられる磨石・石皿、穀物収穫用と推定される褐色チャート製石刃石器、コブウシをかたどった動物土偶など数多くの遺物が出土している。また、土器においては、少量の典型ハラッパー式土器のほかパンジャブ地方東部の在在系と考えられる土器が大量に出土している。これらの出土遺物は日干煉瓦積建物群がインダス文明期の所産であることを明確に示している。

出土した 2 点のインダス式印章（図 12）について若干の説明を加えておくと、1 点は印面に右向きのスィグユウと 2 つのインダス文字を刻む。背面には半円筒形の鈕をもつ。もう 1 点は一部を欠損するものの、印面には左向きのコブウシと 2 つ以上ののインダス文字を刻み、背面



図 12 ファルマーナー遺跡出土印章

には∞字状のしっかりとした鈕をもつ。両者は単に表現される動物の違いだけでなく、動物の向き、彫刻の精粗、鈕形態の違いがある。後者のタイプはインダス文明各地で出土するインダス印章の大半に共通する特徴を有する一方、前者は数は圧倒的に少ないながらもパンジャブ地方東部に集中する傾向がある (Joshi and Parpola 1987)。しかもこの地域で出土する前者のタイプは一般的な一角獣ではなく、ヤギやスイギュウ、レイヨウといった動物を表現する例が多い。また、右向きの動物という点ではシンド地方やグジャラート地方にも三頭獣を表現した例がある。筆者はこうした右向きのタイプをインダス文明後半期に置く見解をとるが (近藤・上杉・小茄子川 2007)、逆にインダス文明期初頭に位置づける考え方もある (第 37 回南アジア学会における J.M. ケノイヤーによる口頭発表、ウィスコンシン大学、2008 年 10 月 17 日)。いずれの説を採るにしても、これらの一群が後者の例に共通する典型インダス印章とは異なっていることを認識する点では共通しており、インダス印章の時間的変遷もしくは地域的差異を考える上で重要な問題である。

上記の発掘区の北側で設定した試掘トレンチでは、日干煉瓦積建物の下位で竪穴住居に推定される大形土坑が検出されている。この面からの出土遺物の検討は進んでいないが、発掘担当者であるシンデーによれば、ギラーワル遺跡で出土した先インダス文明期の土器に類似することであり、先インダス文明期の文化層の上に上述の煉瓦積建物群が築かれていることを示す。この先インダス文明期に推定される下層の調査が進めば、先インダス文明期からインダス

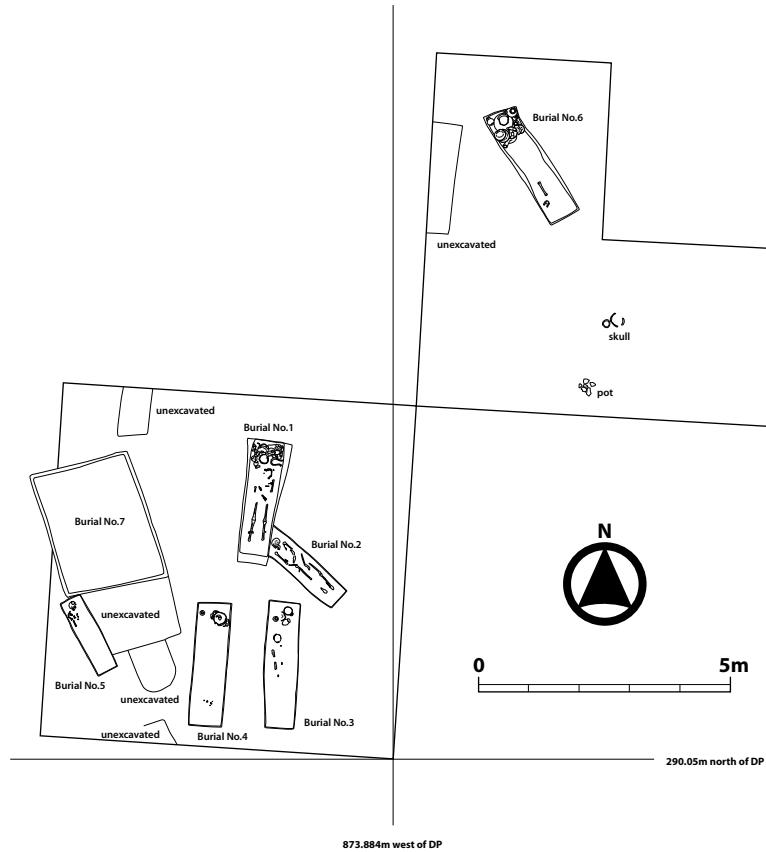


図 13 ファルマーナー遺跡 埋葬址平面図

文明期への文化的変遷を理解することができるようになるであろう。

以上の成果を総合して、ファルマーナー遺跡マウンド部の文化時期区分は以下のようになる。

- I 期 先インダス文明期
- II 期 インダス文明期

なお、この主マウンド部では現地表面付近でマウリア朝からグプタ朝期にかけての遺物が散在的に出土しており、歴史時代においても居住されていたことがわかる。これらの歴史時代の遺物は主として上部が耕作によって削平された土坑からの出土であり、インダス文明期の文化層とは明確に区別した上で調査を行っている。

また、主マウンドから西に約 900m 離れたところで、インダス文明期の墓地が発見されている（図 9・13）。この地域も現代における削平が著しく進んでいるが、その結果の一つとして発掘調査前から人骨や完形大の土器、石製ビーズなどが採集され、埋葬址の存在が確認されることとなった。7 基の発掘調査を実施し、人骨および副葬品を伴う埋葬址を検出した。人骨の遺存状態が良好であった 2 基では成人の仰臥伸展葬が、別の幼児と推定される 1 基では横臥屈葬が確認されている。副葬品としては土器が主であるが、紅玉髓・凍石製ビーズや銅・貝製腕輪も出土している。

ミタータル遺跡の調査

最後にミタータル遺跡（28°53'30"N, 76°10'12"E）である（図 14）。この遺跡は 1968 年にトレ



図 14 ミタータル遺跡

ンチ調査が行われ (Suraj Bhan 1975)、パンジャブ平原東部の主要遺跡となっている。遺跡は約 24 ヘクタールのマウンドを形成している。2007 年度には南マウンドの最高所においてトレンチを設定して発掘調査を実施したが、窯跡および貯蔵施設が検出されたことから調査を中止した。

周辺の遺跡からみたファルマーナー遺跡の位置づけ

本節ではガッガル川流域、すなわちパンジャブ地方東部における文化変遷を理解する上で重要な諸点について概観することとしたい。この地域では在地文化の指標として黒色帯土器群が分布しており、黒色帯土器文化とハラッパー文化の関係、そしてポスト・インダス文明期への移行という点について取り上げる (図 15)。

パンジャブ東部における黒色帯土器伝統

ギラーワル遺跡とファルマーナー遺跡の調査を通して、先インダス文明期からインダス文明期にかけて、口頸部を幅広く黒色彩文で塗り潰した壺を特徴とする土器群が存在したことが確認できた。すでに、カーリーバンガン遺跡の調査でこの種の土器の存在が明らかとなっていたが、ガッガル川、チョウタング川沿いにパンジャブ地方東部にまで分布していることが確認できたことは、この地域の文化変遷を考える上で重要な成果となった。すでにソーティ式土器 (Dikshit 1984) やシースワール式土器 (Suraj Bhan 1973) という名称が一部の遺跡の資料に対して与えられてきたが、ここではより広義の在地土器伝統として「黒色帯土器伝統」の名称を与えることとしたい。

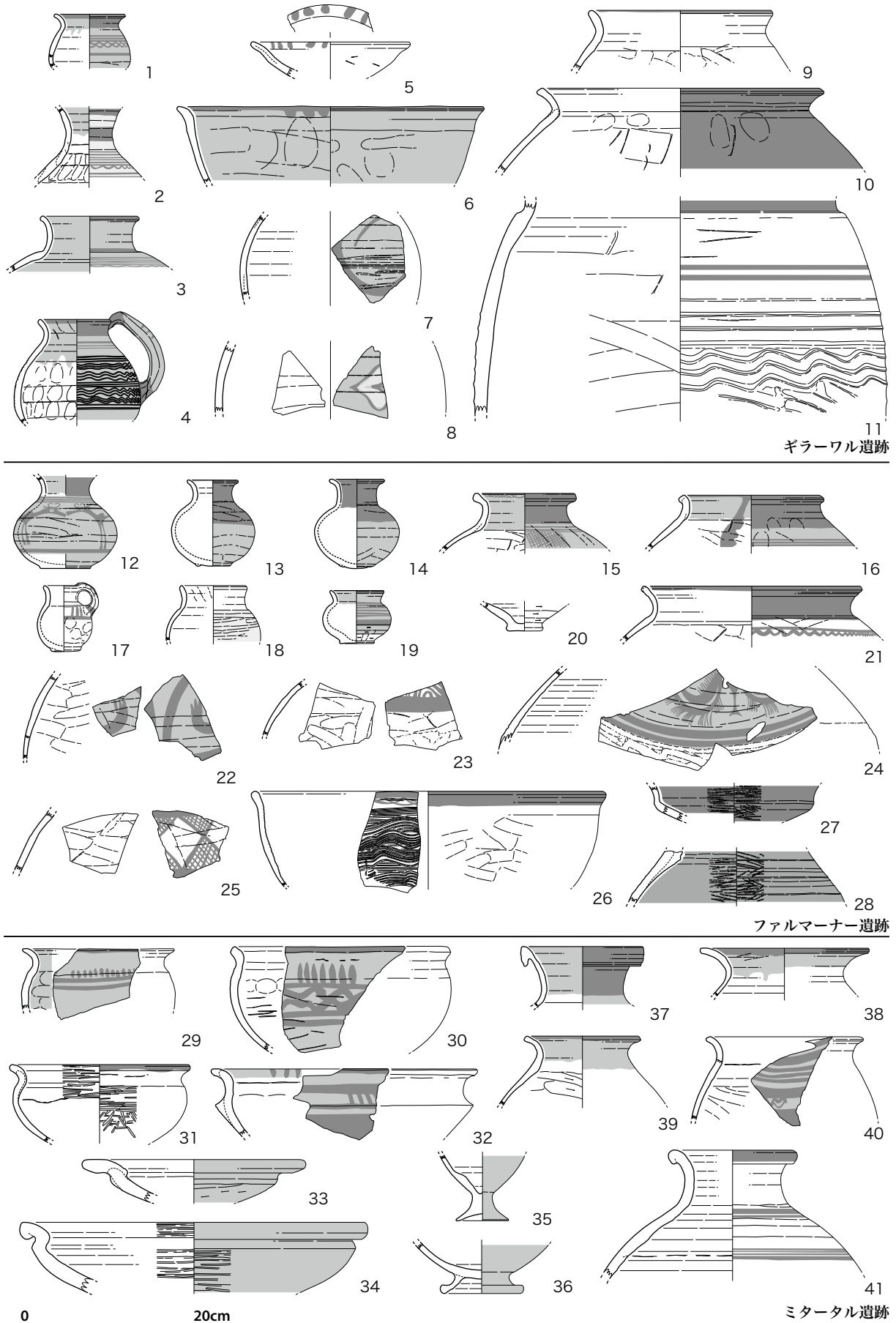


図 15 ギラーワル遺跡・ファルマーナー遺跡・ミタータル遺跡出土土器

ところで、1990年代以降のクナール遺跡やビッラーナー遺跡の発掘調査において、先インダス文明期の土器群の一部に対して「ハークラー式土器 (Hakra pottery)」あるいは「ハークラー文化 (Hakra Culture)」という名称が与えられている (Khatri and Acharya 1995; Rao 2004, 2005, 2006)。このハークラー式土器 (文化) という名称はパキスタン・パンジャーブ州域に位置するチョーリストーン (Cholistan) 地方における M.R. ムガル (Mughal) による遺跡分布調査によって設定されたもので、一部の資料が公刊されている (Mughal 1997)。パンジャーブ地方東部におけるハークラー式土器は、このチョーリストーン地方の資料を意識したものであるが、一部に共通する要素が認められるものの、同一の土器様式として認定するには問題がある。この点を考慮して、(Shinde *et al.* 2008) では「地域型ハークラー文化 (Regional Hakra culture)」という名称が与えられている。いずれにしてもパンジャーブ地方東部の在地の土器伝統の一部を構成するものであって、「ハークラー式土器」といった広域名称は避けるべきであろう。

ギラーワル遺跡ではクナール遺跡 I 期やビッラーナー遺跡 I・II 期に共通する土器が出土している。これが上記の「ハークラー式土器」やそれに後続するとされるソーティ・シースワール式土器に関連する。黒色帯を特徴とする壺類や口縁部の狭小な範囲に彩文を施した単純な彩文土器のほかに、平行線文と波状文を組み合わせた彩文を施すもの、平行凹線文を胴部に広くめぐらすもの (中には凹線文の上から幾何学文もしくは何らかの形象文を施す例もある)、獣角文やピーパル文を施すものがある。

器種構成や器形の点において明確な差異が存在するものの、上記の特徴は近傍のビッラーナー遺跡やクナール遺跡のみならず、西方のカーリーバンガン遺跡やハラッパー (Harappa) 遺跡などとの関係をも示唆している。とりわけ前 3 千年紀前葉の初期ハラッパー文化段階に特徴的な要素であり、この時期にパンジャーブ地方東部が広域交流圏に関与するようになったことを示している。

ただし、上述のように器種構成や器形の点では明確な差異があり、シンド地方やパンジャーブ地方西部のコート・ディジー式土器と同一ではない。初期ハラッパー文化段階に広域交流圏に関わる中で、在地の土器伝統が周辺地域に共通する要素を取り込みながら展開したと考えるべきであろう。

なお、初期ハラッパー文化段階にパンジャーブ地方東部が広域交流圏に関わっていたことは、凍石製の複合同心円文印章の分布にも見て取ることができる。この複合同心円文印章は、バローチスタン高原北東縁部のゴーマル地方からパンジャーブ地方西部、そしてパンジャーブ地方東部に広く分布する印章であり (Uesugi 2008)、広域交流圏の形成とともに交流システムが強化・制度化されたことを背景に出現・分布したものと考えられる。

ハラッパー文化と黒色帯土器伝統との関係

ファルマーナー遺跡では I 期に先インダス文明期、II 期にインダス文明期の文化層が確認された。I 期の出土資料については未検討であるため、ここで II 期の資料をもとにインダス文明期におけるハラッパー文化と在地文化の関係についてまとめておくこととしたい。

上述のように、II 期には調査区の広い範囲において日干煉瓦積建物が検出されている。それとともに典型ハラッパー式土器や凍石製インダス印章、シンド地方ローフリー産と推定される褐色チャート製石刃石器、紅玉髓・凍石を中心とする石製ビーズが出土しており、インダス文明期の遺構・遺物群であることが確認できる。

		Harappa	Girawad	Farmana	Mitathal	Rakhi Garhi	Banawali	Kunal	Bhorrana	Kalibangan	Ropar	Bala
Late Harappan		?			?		?					
		5			IIB		III					
		(1800 BC?)										
		4										?
		(1900 BC)										Upper
Harappan	Late	3C								IIB		
		(2200 BC)										
	Middle	3B		?	IIA	II	II			II	IB	Middle
		(2450 BC)										
	Early	3A		II					IIA			
		(2600 BC)										
		2				Ib		Ic				
Pre-/Early Harappan		(2800 BC)		I	I		I		IB	I	IA	Lower
		1				Ia		Ib				
								Ia	IA			

図 16 パンジャーブ地方東部における編年

こうしたハラッパー文化に伴う諸々の遺物とともに、明らかにハラッパー式土器とは異なる土器群が多量に出土している。黒色帯土器に属する壺類のほか、半同心円文や斜格子充填菱形文、獣角文を描くものであり、先インダス文明期の在地土器に共通する要素を含む。一方で、先インダス文明期の土器群とは異なる要素も存在しており、在地の土器様式がインダス文明期に変化したものであると考えられる。

すなわち、II 期においてはハラッパー文化と在地の文化が併存していたことを示唆している。こうした両者の併存関係はグジャラート地方とも共通する現象であり、インダス文明社会が広域に広がるハラッパー文化と各地の在地文化の関係において存在していたことを物語っている。初期ハラッパー文化段階からインダス文明期にかけて、ハラッパー文化と在地文化がどのように関係し、文明期の社会構造を形成するにいたったのかが今後の調査・研究課題として認識できるであろう。

後期ハラッパー文化の問題

ミタータル遺跡においては 1968 年にクルクシェートラ大学のスーラジ・バーン (Suraj Bhan) によって発掘調査が実施されている。その成果を再検討すべく 2006 年度の調査の一環として試掘調査を実施したが、遺跡の理解にとって良好な情報を得るにはいたらなかった。そこで、ここではかつてのスーラジ・バーンによる発掘調査成果と 2006 年度の表面採集資料をもとに、インダス文明期からポスト・インダス文明期にかけての文化変遷についてまとめておくこととしたい。

1968年の調査では、I期に先インダス文明期、IIA期にインダス文明期、IIB期にポスト・インダス文明期という文化層序が明らかにされている。すなわち、ソーティ・シースワール式土器の段階から、ハラッパー式土器が出土する段階、そして在地色の強い土器群によって特徴づけられる段階への変遷である。先インダス文明期からポスト・インダス文明期への変遷が層位的に把握できる点で、文化編年の構築にとってきわめて重要な遺跡となっている。

従来、パンジャブ地方東部においては、後期ハラッパー文化の問題が注目されてきた。パンジャブ地方東部北半部においてはバーラー式土器 (Bala pottery) が、南部においてはミタータル IIB 式土器が、そして東のガンガー＝ヤムナー・ドーアーブ地域では赭色土器 (Ochre-Coloured pottery) が後期ハラッパー文化段階すなわちポスト・インダス文明期において分布しており、それらがハラッパー式土器とどのような関係にあるのかが問題として認識されてきたという経緯がある。バーラー式土器に関しては先インダス文明期の在地土器様式が文明期を通じて存在し、ポスト・インダス文明期へと続いたという見解が Y.D. シャルマー (Sharma) によって指摘されてきたが (Sharma 1982)、この先インダス文明期の在地文化とハラッパー文化の関係、さらにはポスト・インダス文明期における在地文化の展開という問題は、単にバーラー式土器にとどまらず、インダス文明各地の問題として浮上することは前節において述べたとおりである。

そこでミタータル遺跡で表面採集した土器資料を検討すると、ハラッパー式土器とは明確に異なる特徴をもった土器群であることがわかる。口縁部を狭く塗彩する土器や口頸部を広く塗り潰した壺類、口縁部が短く外反する浅鉢など、ギラーワル遺跡やファルマーナー遺跡で出土した在地系土器に共通する特徴を有している。また、ミガキ調整を施した資料が多くみられる点も在地系土器の伝統を示すものと考えられる。

層位的に採集された資料ではないため、採集資料をかつてのスーラジ・バーンによる発掘調査で提示された文化時期区分に厳密に対応させることはできないが、器形の点ではギラーワル遺跡とファルマーナー遺跡の出土土器と異なることから、IIB 期を中心とする時期の土器が大半であろうことが推測できる。この推測は、壺類や浅鉢類にポスト・インダス文明期のバーラー式土器や赭色土器に共通する器形が存在することからも補強することが可能であろう。

こうした検討結果にもとづくと、確実にポスト・インダス文明期において先インダス文明期以来の在地系土器の伝統がパンジャブ地方東部に存在していることが確認できる。すなわち、バーラー式土器において指摘されたように、先インダス文明期の土器様式がインダス文明期を経て、ポスト・インダス文明期にまで一つの伝統として存続していたということであり、インダス文明の衰退はハラッパー文化の要素の欠落を意味することがわかる。

こうした在地文化のポスト・インダス文明期における存続現象は、前節で述べたインダス文明期におけるハラッパー文化と在地文化の関係だけでなく、インダス文明の衰退過程を理解する上でも重要である。ポスト・インダス文明期は広域交流ネットワークを支える都市の衰退と狭域型の地域文化の分立によって特徴づけられるが、それは広域交流ネットワークの衰退によってインダス文明以前の地域社会構造が再び顕在化したことによると考えられる。ただし、注意すべきは先インダス文明期の在地文化がそのままポスト・インダス文明期にまで存続したのではなく、インダス文明期の社会変容を経て、在地文化もまたその伝統を継承しつつも変容した可能性がきわめて高いということである。とりわけ地域間関係においては先インダス文明期から大きく変化していると予想され、単に地域文化伝統の存続として理解するのではなく、ポ



図 17 ガンウェリワラー遺跡

スト・インダス文明期に形成された地域文化間の関係を注視する必要がある。

4 チョーリスターン地方の調査

パキスタンではパンジャーブ州南部のチョーリスターン地方にあるガンウェリワラー遺跡（図 17）において、パンジャーブ大学教授ファルザンド・マシー（Farzand Masih）を調査隊長として、3ヶ年の調査を計画している。ガンウェリワラー遺跡はモヘンジョダロ遺跡、ハラッパー遺跡と同程度の面積をもつ遺跡として以前より注目されてきた（Mughal 1997）。ハークラー川流域に位置するとともに、北のハラッパー遺跡から約 270km、南のモヘンジョダロ遺跡と約 330km の位置にあり、インダス文明社会の交流ネットワークを検討する上で鍵となる遺跡である。

2007 年 4 月にマシーとウィスコンシン大学の J.M. ケノイヤー（Kenoyer）を中心として遺跡の測量調査を実施した。その結果、遺跡は東西 2 つのマウンドから構成され、モヘンジョダロ遺跡、ハラッパー遺跡同様に、西マウンドが高く、東マウンドが低いという特徴を有している。いわゆる城塞と市街地からなる遺跡である可能性が高い。

2007 年 12 月から 2008 年 1 月にかけて発掘調査を実施する予定であったが、パキスタン国内の政治情勢の混乱のため、発掘調査を延期することとした。次年度以降に調査の可能性を模索する予定である。

5 インダス文明の構造的理解に向けて

インダス文明研究は関連遺跡がインドとパキスタンにまたがって分布していることから、両国の研究者のみならず、外国人研究者にとっても、両国で蓄積される資料を統合的に理解することが困難な状況にあった。また、インダス文明社会には数多くの地域社会・文化が包摂されており、それぞれの地域社会・文化を正しく位置づけて全体像を理解することも決して容易ではなかった。その結果、インダス文明社会の歴史的理解に諸説が提示される状況が生み出されている。

インダス文明社会はさまざまな地域社会・文化を包摂するとともに、西南アジア世界と広く交流ネットワークを発達させることによって展開した社会である。文明期においても地域ごとの多様性はかつて考えられていた以上に大きい可能性が高い。そうした多様性をもった地域社会・文化がいかなる過程を経て一つの文明社会のシステムに統合され、そして再び解体・分散していくこととなったのか。前3千年紀の西南アジア文明世界を理解する上でも重要な研究対象である。

この目的の上において、地域間交流と交通路の発達の解明が第一ステップとなろう。バローチスタン高原からインダス平原においては前4千年紀後半以降に地域社会の形成と地域間交流の活発化が進行するが、交流システムの様態は決して一様ではなく、交流の核となる地域や拠点、交流関係の強弱、交流関係の物質的側面への発現などの諸点でさまざまな変化が認められる。こうした先インダス文明期から続く交流システムの変転がインダス文明社会の成立にどのように影響を及ぼしたのか、またインダス文明社会の交流システムの変化（拡大、縮小、中心地の移転など）が文明社会の歴史的展開にどのように作用したのか。さまざまな研究課題が浮上する。

こうした地域間関係の形成や変化を促した要因は何であったのだろうか。その一つとして注目されるのは、資源の偏在性である（図18）。先インダス文明期からインダス文明期にはさまざまな資源がさまざまなかたちで利用されたことがわかっている。例えば、広域流通交易品であった各種石製ビーズや海産性貝輪、あるいは銅製品を生産するための銅鉱石など考古遺物として遺存する器物のほか、各種穀物や畜産品、木材、綿布などの残りにくい資源が利用されていたことが知られている。ところが、こうした資源はインダス文明が展開した地域に一様に分布するのではなく、地域的に偏在するという特徴をもっている。

モヘンジョダロ（Mohenjo-daro）遺跡とハラッパー遺跡という二大都市遺跡が存在するインダス平原中央部では豊かな土壌が広がり、穀物生産に適しているが、木材や石材に乏しい。逆にバローチスタン（Balochistan）高原やグジャラート地方、あるいは北方山間地域はビーズに用いられたさまざまな半貴石を産する。海産性の巻貝はグジャラート地方の沿岸部や西のマクラーン（Makran）地方に、木材は北方山間地域に産出する。

平原部に文明社会が形成されるためにはこうした諸々の資源に豊かな周辺地域を取り込む必要がある。また、装身具のような奢侈品を価値あるものとして流通させるためには、その原材料へのアクセスを制限し、生産を一元化することが必要となる。インダス文明域で生産されたビーズがメソポタミア地域にまで分布することは、まさに装身具を高価値稀少財として管理したインダス文明社会の特質を物語っている。

こうした偏在型資源の存在が交易を発達させ、地域間関係の形成や再編を促した可能性が高

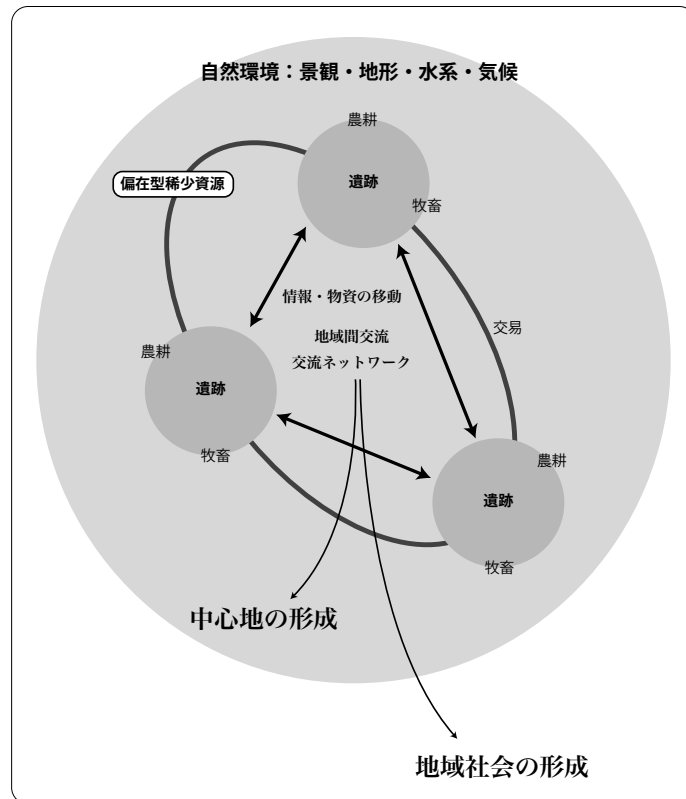


図 18 地域社会の形成に関する概念図

い。地域間関係にはさまざまなレベルがあり、考古資料で把握される以上に複雑なものであったことは疑い得ないが、地域間交流の発達に伴って広大な地域が相互の関係性を形成し、それが一つの社会システムへと統合されたのがインダス文明社会であったと考えられる。都市の発達や文字の創出などインダス文明社会を特徴づける要素は、こうした広域社会統合によって生み出されたものであろう。

偏在資源の流通を介した地域間関係の復元のためには、一つには偏在資源の各地・各遺跡での出土状況を検討し、その状況に時間的・空間的変異が存在するのかどうか分析を進めることが一つの手段となろう。石材に関してはハラッパー遺跡の出土資料を中心にウィスコンシン大学のランダル・ロウ（Randall Law）が網羅的な研究を進めており（Law 2006）、先インダス文明期からインダス文明期にかけての石材流通の実態が明らかにされつつある。こうした原産地の特定と遺跡出土資料の同定に基づく研究が偏在資源を手掛かりとした地域間関係の研究に端緒を開くことは間違いないであろう。

もう一つの地域間関係を明らかにする上で重要な方法は、土器を中心とした各種遺物の系統分類にもとづく地域性の抽出である。上に典型ハラッパー式土器と在地系土器という大別でその併存する状況を説明したが、実際にはさまざまな地域様式が各種の遺物に存在しており、いかにそうした地域的差異をインダス文明前後の時期における地域間関係の研究に活かしていくかが鍵となろう。ハラッパー式土器の中にも地域的もしくは遺跡間の差異は存在しており、そうした差異を詳細に把握していくことが求められる。

偏在資源や地域的差異を伴った遺物群の一遺跡内での分布もまた、流通・消費の仕組みや社会構造を考える上できわめて重要なところである。偏在型稀少資源が文明社会のイデオロギーと結びついていたと仮定するならば、必然的に原材料やそれを加工した器物の分布にもまた偏

在性が生じるであろう。社会的エリートが稀少資源に独占的なアクセス権を保有していたことも十分に考えられるところである。逆に文明圏内で等質に流通し、各遺跡で同じように消費されていたとすれば、それもまたインダス文明社会の特質として認識されるであろうし、さらなる研究課題の抽出を可能にするであろう。

一方、インダス文明社会の衰退はこうした地域間交流によって支えられた社会統合の弛緩と解体によって特徴づけられる。パンジャブ地方西部のハラッパー遺跡では、前 2000 年頃を境として遺跡に残される装身具類の素材に変化が認められることが J.M. ケノイヤーによって指摘されている (Kenoyer 2005)。同時にハラッパー文化の要素にもさまざまな変化が認められるようになる。また、広域的にみるとパンジャブ地方東部やグジャラート地方で小規模な遺跡が増加するという現象も確認される。こうした諸現象は明らかに社会構造の変化を示唆しており、インダス文明社会の衰退とポスト・インダス文明期の社会への再編の兆しをみせている。社会構造の変化は諸資源の流通システムの変化を伴うものであり、あるいは逆に資源流通の変化が社会構造の変化をもたらした可能性もある。最終的に都市が失われ、文明期の社会構造が姿を消したのは、こうした変化に社会が対応できなかった結果とみられる。

その背景に大規模な自然環境の変化、例えば地殻変動や河川の流路変更や涸渇・消滅があったのかどうか、あるいはより人為的な要因が関わっていたのか今後の研究課題であるが、人類社会の側からみれば、文明社会の衰退とは高度に発達した社会統合システムの衰退という人為的現象にはかならない。社会統合システム衰退の原因として自然現象が関与している可能性は十分にあるが、単純な環境決定論的な解釈では文明システムの衰退という人為的現象を説明することはできず、自然現象あるいは自然環境の変化から文明システムの衰退へとつながる一連のプロセスを明らかにすることが求められるであろう。

また、衰退の歴史的背景としてイラン高原との関係やメソポタミアとの関係も検討課題である。さらに、近年では余り顧みられることがないが、インド・アリア語族の拡散の問題も、インダス文明の衰退に関わるかどうかは別として、ポスト・インダス文明期の社会を考える上で重要である。文明システムの衰退という現象あるいは新たな社会システムへの変容・移行という歴史的現象に対して、自然科学・人文科学諸分野からの多角的なアプローチが求められるところである。

さて、インダス・プロジェクトにおける調査対象遺跡に立ち戻ってみると、ガンウェリワラー遺跡は先インダス文明期より南北の交流軸の一つとして機能した可能性が高いガッガル・ハークラー川流域に形成された遺跡であり、ハラッパー遺跡とモヘンジョダロ遺跡というインダス文明社会の拠点の中間に位置する点で、交流システムの発達を検討する上で重要である。

グジャラート地方は初期ハラッパー文化期にインダス川流域との交流システムの中に組み込まれていくことになるが、インダス文明期には紅玉髓や海産性巻貝の素材供給地として重要な役割を果たすようになる。そこで注目されるのは在地の文化集団とハラッパー文化系集団の共存という現象である。すなわち、先インダス文明期の在地文化の流れを汲む集団（複数系統がある）、ハラッパー文化に帰属するかまたはその影響を受けた集団、さらには北のアラヴァリー山脈を中心に展開したバナース文化集団がインダス文明期のグジャラート地域に関係的に共存する現象である。交流システムの拡大と多様な文化集団の参画、その結果もたらされる交流システムの変容という現象がグジャラート地方のインダス文明期の特質となっており、カーンメール遺跡の調査においても重要な課題である。

一方、パンジャブ平原東部はよりハラッパー文化の影響が強く及んだ地域であるが、その一方で黒色帯土器に代表される在地系土器の伝統が文明期から後期ハラッパー文化期へと展開していくことになる。この地域は前4千年紀後半にはパンジャブ地方西部との交流関係を発達させ、それ以降、インダス文明社会の交流システムの東縁部に位置づけられていく。しかし、インダス文明後半期から後期ハラッパー文化期には交流システムの核へと転じて重要性を増大させ、前2千年紀後半以降のガンガー平原の開発へと展開することになる。

パンジャブ平原の東端部に位置するギラーワル遺跡、ファルマーナー遺跡、ミタータル遺跡の調査は、この地域の文化編年の構築に寄与するだけでなく、先ハラッパー文化期における地域社会の成立から、ハラッパー文化との接触、さらにインダス文明後半期以降の核地域への変容という問題を明らかにする上で多くの情報を提供することになる。

謝辞

小稿をなすにあたっては、インド・パキスタンで調査を指揮する V. シンデー、J.S. カラクワール、E. マシー、J.M. ケノイヤーから数多くのご教示を頂いた。元インド政府考古局副長官である R.S. ビシュト (Bisht) には調査成果の評価に関してきわめて有益なご教示を頂戴した。資料調査に際しては、ローフタク所在のマハーリシ・ダヤーナンド (Maharishi Dayanand) 大学教授の マーン・モーハン・クマール (Man Mohan Kumar) および博士課程在学中の ヴィヴェーク・ダーンギー (Vivek Dangi)、バローダー所在のマハラージャ・サヤジラーオ (Maharaja Sayajirao) 大学講師 K. クリシュナン (Krishnan) および P. アジートプラサード (Ajithrasad) の各氏から格別のご高配とご教示を賜った。また資料調査では小茄子川歩 (デカン大学博士課程) および木村聡 (東海大学博士課程前期課程) に助けていただいた。以上、ご芳名を銘記して深謝申し上げます。

【註】

1) 本稿ではインダス文明期を中心とする前後の時代を「先インダス文明期」「インダス文明期」「ポスト・インダス文明期」と呼ぶ。欧米や南アジアにおいては「先ハラッパー文化期 (pre-Harappan period)」「ハラッパー文化期 (Harappan period)」「ポスト・ハラッパー文化期 (post-Harappan period)」あるいは「後期ハラッパー文化期 (Late Harappan period)」、または「先都市期 (pre-Urban phase)」「都市期 (Urban phase)」「ポスト都市期 (post-Urban phase)」、または「地域文化の時代 (Regionalization Era)」「地域統合の時代 (Integration Era)」「地方文化の時代 (Localization Era)」といった用語が用いられるが、ここではインダス文明社会がハラッパー文化のみで構成されるわけではないことを重視し、「ハラッパー文化」を文明社会全体に敷衍するような呼称は避けることとした。ハラッパー文化は確かに要素の一部が文明社会各地に分布するものの、その母体はシンド地方およびパンジャブ地方西部に存在すると考えられる。各地の地域文化がハラッパー文化によって一つの文明社会システムとして統合されたのは一面では事実であるが、ハラッパー文化のみでインダス文明社会を説明できるわけではない。また、「都市」の存在を重視した時期区分概念においては、各地に展開した都市の成立および衰退の時期が明確ではなく、各都市によって時間的差異が存在する可能性も十分に考えられることから、適切な表現ではないと判断した。ただし、インダス文明の成立を何によって画するかという問題は決して容易ではない。都市の成立と独自のインダス印章・文字の

創出を一つの基準として考えているが、両者が同時に生じたかどうかは不明である。そもそもどのような様態をもって都市成立とするかについても十分な調査データや議論がなく、曖昧としたままである。今後の研究課題として措かざるを得ないが、問題を明確にして議論の俎上に上げていくことが今後の研究において重要であろう。なお、「初期ハラッパー文化期 (Early Harappan period)」については「初期インダス文明期 (Early Indus period)」(Allchin and Allchin 1982) と呼ぶことも可能だが、都市や印章、文字が初期ハラッパー段階においては確立しておらず、「文明期」の一部として「初期インダス文明期」と呼ぶのは必ずしも適切とはいえない。「初期ハラッパー文化期」という名称にも問題を残すが、ここではそのまま採用することとした。

2) マハーラージャ・サヤジラーオ大学考古学・歴史学科における実見による。

3) デカン大学博士課程学生の P. シルワールカル (Shirwalkar) のご教示およびデカン大学での実見による。

【引用・参考文献】

- Ajithprasad, P. (2002) "The Pre-Harappan Cultures of Gujarat", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect Vol.II: Protohistory: Archaeology of the Harappan Civilization*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp.129-158.
- Bisht, R.S. (1982) "Excavations at Banawali, 1974-77", G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspective*. Oxford & IBH, Delhi. pp. 113-124.
- Bisht, R.S. (1991) Dholavira: a new horizon of the Indus Civilization. *Purātattva* 20: 71-82.
- Bisht, R.S. (1999) Dholavira and Banawali: Two different paradigms of the Harappan urbis forma. *Purātattva* 29: 14-37.
- Bisht, R.S. (2005) "The Water Structures and Engineering of the Harappans at Dholavira (India)", in C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.) *South Asian Archaeology 2001*. Éditions Recherche sur les Civilisations, Paris. pp. 11-25.
- Bisht, R.S. and S. Asthana (1979) "Banawali and Some Other Recently Excavated Harappan Sites in India". in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1977*. Istituto Universitario Orientale, Naples. pp. 225-240.
- Dikshit, K.N. (1984) "The Sothi Complex: Old Records and Fresh Observations", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization*. Indian Archaeological Society/Books & Books, New Delhi. pp.531-537.
- Gupta, S.P. (1996) *The Indus-Saraswati Civilization: Origins, Problems and Issues*. Pratibha Prakashan, Delhi.
- Herman, Ch.F and K. Krishnan (1994) "Micaceous Red Ware: a Gujarat Proto-Historic cultural complex or just ceramics?" in A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedeakatemia, Helsinki. pp.225-243.
- Hegde, K.T.M., K.K. Bhan, V.H. Sonawane, K. Krishnan and D.R. Shah (1990) *Excavation at Nageshwar, Gujarat: A Harappan Shell Working Site on the Gulf of Kutch*. Department of Archaeology & Ancient History, M.S. University of Baroda.
- Hegde, K.T.M., V.H. Sonawane, D.R. Shah, K.K. Bhan, P. Ajithprasad, K. Krishnan and S.P. Chandran (1988) Excavation at Nagwada, 1986 and 1987: a preliminary report. *Man and Environment* XII: 55-65.
- Herman, Ch.F. (1997) "The Rangpur Sequence of "Harappan" Gujarat (India): S Re-assessment", in R. and B. Allchin (eds.) *South Asian Archaeology 1995*. The Ancient India and Iran Trust, Cambridge. pp.187-198.
- Joshi, J.P. (1990) *Excavation at Surkotada and Exploration in Kutch*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no. 87. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Joshi, J.P. and A. Parpola (1987) *Corpus of Indus Seals and Inscriptions: 1. Collections in India*. Suomalainen Tiedeakatemia, Helsinki.
- Kenoyer, J.M. (1998) *Ancient Cities of the Indus Valley Civilization*. American Institute of Pakistan Studies/Oxford University Press, Karachi.
- Kenoyer, J.M. (2001) "Wealth and socioeconomic hierarchies of the Indus Valley civilization", in J. Richards and M. V. Buren (eds.)

- Order, Legitimacy and Wealth in Ancient States*. Cambridge University Press, Cambridge. pp. 88-109.
- Kenoyer, J.M. (2005) "Culture Change during the Late Harappan Period at Harappa", in E.F. Bryant and L.L. Patton (eds.) *The Indo-Aryan Controversy: Evidence and inference in Indian history*. Routledge, London/New York. pp.21-49.
- Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2007) Kanmer: A Harappan site in Kachchh, Gujarat, India. *Occasional Paper 2*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature: 21-46.
- Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2008) Preliminary observations on the excavation at Kanmer, Kachchh, India 2006-2007. *Occasional Paper 5*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature: 5-24.
- Khatri, J.S. and M. Acharya (1995) Kunal: A new Indus-Saraswati site. *Purātattva* 25: 84-85.
- Lal, B.B., B.K. Thapar, J.P. Joshi and M. Bala (2003) *Excavations at Kalibangan: The Early Harappan (1960-69)*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.98. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Law, R. (2006) "Moving Mountains: the Trade and Transport of Rocks and Minerals within the Greater Indus Valley Region", in E.C. Robertson, J.D. Seibert, D.C. Fernandez and M.C. Zender (eds.) *Space and Spatial Analysis in Archaeology*. University of New Mexico Press, Albuquerque. pp.301-313.
- Misra, V.N. (1997) Balathal - A Chalcolithic settlement in Mewar, Rajasthan, India: Results of first three seasons excavations. *South Asian Studies* 13: 251-273.
- Misra, V.N., V.S. Shinde, R.K. Mohanty, K. Dalal, A. Mishra, L. Pandey and J.S. Kharakwal (1995) Excavations in Balathal: Their contribution to the Chalcolithic and Iron Age culture of Mewar, Rajasthan. *Man and Environment* XX(1): 57-80.
- Misra, V.N., V.S. Shinde, R.K. Mohanty, L. Pandey and J.S. Kharakwal (1997) Excavations at Balathal, District Udaipur, Rajasthan (1995-97) with special reference to Chalcolithic architecture. *Man and Environment* XXII(2): 35-59.
- Mughal, M.R. (1997) *Ancient Cholistan: Archaeology and Architecture*. Ferozsons, Lahore.
- Nath, Amarendra (1998) Rakhigarhi: A Harappan metropolis in the Sarasvati- Drishadvati divide. *Purātattva* 28: 39-45.
- Nath, Amarendra (1999) Further excavations at Rakhigarhi. *Purātattva* 29: 46-49.
- Nath, Amarendra (2001) Rakhigarhi: 1999-2000. *Purātattva* 31: 43-46.
- Patel, A.K. (2008) "New Radiocarbon Determinations from Loteswar and their Implications for Understanding Holocene Settlement and Subsistence in North Gujarat and Adjoining Areas", in E.M. Raven (ed.) *South Asian Archaeology 1999*. Egbert Forsten, Groningen. pp.123-134.
- Possehl, G.L. (2002) *The Indus Civilization: A Contemporary Perspective*. Vistaar Publications, New Delhi.
- Possehl, G.L. and Ch.F. Herman (1990) "The Sorath Harappan: A New regional Manifestation of the Indus Urban Phase", in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1987*. IsMEO, Rome. pp.295-319.
- Possehl, G.L. and M.H. Raval (1989) *Harappan Civilization and Rojdi*. E.J. Brill, Leiden/New York/København/Köln.
- Pramanik, Shubhra (2004) Excavation at Juni Kuran 2003-04: A preliminary report. *Purātattva* 34: 45-67.
- Rao, L.S., Nandini B. Sahu, Prabhash Sahu, U.A. Shatry and Samir Diwan (2004) Unearthing Harappan settlement at Bhirrana (2003-04). *Purātattva* 34: 20-24.
- Rao, L.S., Nandini B. Sahu, Samir Diwan, Prabhash Sahu and U.A. Shatry (2005) New light on the Excavation of Harappan settlement at Bhirrana. *Purātattva* 35: 60-68.
- Rao, L.S., Nandini B. Sahu, U.A. Shatry, Prabhash Sahu and Samir Diwan (2006) Bhirrana Excavation: 2005-06. *Purātattva* 36: 45-49.
- Rao, S.R. (1962) Excavation at Rangpur and other explorations in Gujarat. *Ancient India* nos.18 &19: 5-207.
- Rao, S.R. (1979/1985) *Lothal 1955-62*, 2 volumes. Memoirs of the Archaeological Survey of India no. 78. Archaeological Survey of India, New Delhi.

- Rydh, H. (1959) *Rang Mahal*. Lund.
- Sankalia, H.D., S.B. Deo and Z.D. Ansari (1969) *Excavations at Ahar (Tambavati)*. Deccan College Postgraduate and Research Institute, Poona.
- Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej (India)". in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*. Oxford & IBH Publishing, New Delhi. pp.141-165.
- Shinde, V. (1992) Excavations at Padri - 1990-91: a Preliminary Report. *Man and Environment* XVII(1): 79-86.
- Shinde, V. and S.B. Kar (1992) Padri Ware: a New Painted Ceramic Found in the Harappan Levels at Padri in Gujarat. *Man and Environment* XVII (2): 105-110.
- Shinde, V., T. Osada, M.M. Sharma, A. Uesugi, T. Uno, H. Maemoku, P. Shirvalkar, S.S. Deshpande, A. Kulkarni, A. Sarkar, A. Reddy, V. Rao and V. Dangi (2008a) Exploration in the Ghaggar Basin and excavations at Girawad, Farmana (Rohtak District) and Mitathal (Bhiwani District), Haryana, India. *Occasional Paper* 3. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature: 77-158.
- Shinde, V., T. Osada, A. Uesugi and M.M. Kumar (2008b) A Report on Excavations at Farmana 2007-08: A Harappan Site in the Ghaggar Basin. *Occasional Paper* 6. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto: 1-116.
- Sonawane, V.H. and P. Ajithprasad (1994) Harappa Culture and Gujarat. *Man and Environment* XIX(1-2): 129-139.
- Suraj Bhan (1973) "The Sequence and Spread of Prehistoric Cultures in the Upper Sarasvati Basin", in D.P. Agrawal and A. Ghosh (eds.) *Radiocarbon and Indian Archaeology*. Tata Institute of Fundamental Research, Bombay. pp.252-263.
- Suraj Bhan (1975) *Excavations at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*. Kurukshetra University, Kurukshetra.
- Uesugi, A. (2008) "Cultural Interaction between the Indus Valley and the Iranian Plateau", in Indus Project (ed.) *Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.20-24.
- Quivron, G. (2000) The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* vol.50 nos.1-4: 147-190.
- 上杉彰紀 (2008) 「インダス・プロジェクト 2007 - インド・パキスタンにおけるインダス文明遺跡の調査 -」『平成 19 年度 考古学が語る古代オリエント 第 15 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、132-138 頁。
- 上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察—彩文土器の編年を手掛かりとして—」『西アジア考古学』第 9 号、日本西アジア考古学会、101-118 頁。
- 近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 (2007) 「クッリ式土器とその意義—岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて—」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第 21 巻、岡山市立オリエント美術館、15-50 頁。